

小白鬼の冒険—ショウ
バイグイのぼうけん—

りるば

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドラゴンボール憑依物。

とあるキャラに憑依(?)した主人公。

そんな彼が頑張つて生き抜くお話。

※警告タグは飾りではありません。苦手な方は退避を。

目次

- 第壱話 水を運ぼう、どこまでも 1
- 第弐話 車は揺れるよ、コトコトと 28
- 第参話 技を極めよう、静々と — 44
- 第四話 飛天昇空、ビュンビュビュン 77
- 第五話 殺悪是悪、武の真髓 — 100
- 第六話 とことこ走るよ、旅の道 146
- 第七話 極悪非道、白の鬼 — 180

第壱話 水を運ぼう、どこまでも

目覚めは最悪だった。

……いや。

そもそも僕は、目が覚めているのか？

寝床から上半身を起こす。空気は肌を刺すように冷たい。

視界はゆらゆら、頭はふらふら。

あ……そうだ……。水を汲みに行かなくちや……。

肌が付いた藁わらをパラパラと落とし、のそのそと薄汚れた上着を羽織る。

そして、壁に立て掛けてある天秤てんびんぼう棒を手に取る。

天秤棒……つてなんだ？

水桶みずおけを棒の両端に取り付け、棒の中心を肩に担ぐ。

何を言っているんだ、僕は……。水桶を担ぐ為の棒じゃないか。

こんな、毎日使うような道具を……。

毎日使う道具？ こんなもの、使った事あつたっけ？

部屋を一周するように視線が動き、ボロボロな木の門ドアに向く。

汚い部屋……。そして、何も無い部屋。

馬小屋？ ……でも馬はいない。

納屋？ ……でも農具も何も無い。

自分の腕が伸び、門の門かんぬきを上げる。

短い……小さな、白い腕だ。

僕の意味に関係なく身体は勝手に動く。

いや……、そんな事はない。この身体を動かしているのは僕だ。

……でも、勝手に動いている？

僕は何を言ってるんだろう？

外に出ると村の景色が否応にも目に映った。

そのまま僕の足は川を目指す。

寒々とした村だ。

地面は泥でぬかるみ、

周りの木々には葉っぱ一枚なく、みんな禿げた物。

そして寒い……。

だから、寒々とした村なんだ。

泥で出来た壁に、藁葺屋根の家々。

その間に挟まれた未舗装の泥道を進んでいく。

庭で芋を干していたおばさんが僕に視線を向けた。

いやそんな顔で家に戻っていくおばさん。

何かあつたんだらうか？

そして、歩く。

延々と坂を下り続ける。

いつものことながら長い道のりだ。

でも、帰りは上り坂。

もつと長い……。

いつも？

まあ、いつか……。

ようやく川に辿り着く。

川岸で女達が洗濯物を棒で叩きながら、おしゃべりに興じている。

僕が近づくと、話し声が止んだ。

桶に水を汲み、再び天秤棒の両端に引っ掛けて肩に担ぐ。

少し、重い……。
でも、もう慣れた重みだ。

長い上り坂を経て、ようやく村長さんのお屋敷に辿り着く。
裏に回って保存庫の一室へ。

薄暗い中、大きな瓶かめが一杯並んでいる。

そのうちの一つの蓋を取り、汲んで来た水を流し入れる。
”ドジャー”という水の音。

もう一つの桶も”ドジャー”と流し入れる。

これかめでようやく瓶の六分の一ぐらい。

また天秤棒を担ぎ、川を目指す。

川から水を汲み、重くなった両肩で村への山道を歩く。

「お！ いたいた、鬼っ子！」

「二人二十個な！」

村の子供達だ。

彼らは僕に向かって石を投げ始める。

「おっしや！ 今俺の、一個当たった！」

「でめえ、動くんじやねえよ！」

痛い……痛いよ……。

天秤棒を水桶ごと地面に置き、顔と頭を押さえうずくまる。

前にこれを担いだままで、桶をひっくり返した事があつたんだ。

前に？

「っしや！ 俺八個！」

「俺九！」

「お前、一個多く投げたろ！」

「はあ!? ざっけんなよ！」

「てめえらと違つて俺はずつと頭狙い！」

「だからなんだよ!？」

やつと終わった……。

速く離れないと。

「超飛翔飛び蹴りー！ イエーイ!!」

バシヤ、カン、コン、コンと桶が蹴り飛ばされた。

こぼれた水が坂の斜面に沿つて流れ落ちていく。

「ほら、もう行こうぜ」

コン、バシヤ。

そう言つて、違う子供が残つた水桶を蹴り倒す。

「干し芋食いに行こうぜ」

「じゃなー！ 鬼っ子！ また明日遊んでやるよ！」

「ハハハハ」

走り去りながらそう言い残す子供達。

また汲み直しにいこう。

今日のうちに、瓶かめ七つ分を一杯にしないと……。

~~~~~

変わらず天秤棒を担ぐ。

もう、お月様が天に顔を出してきた。

辺りは真つ暗。

よし。

水を瓶かめに注ぐ。

これで、最後。

報告に……行かないや。

トコトコとお屋敷の正面に回り、トン、トン、トンと村長さんの家の門を叩く。

誰も出ない。

もう一度トン、トンと叩いたら、門が”キィー”と内側に開いた。

誰も居ないのかな？

開いた隙間から中を覗く。

「おい、てめえ！ 入ってくんじゃねえよ、糞ガキ！ 汚ねえだろうが！」  
年齢二十前後の若い男が顔を出す。確か……村長さんの息子さんだ。

「ほら、エサだよ！」

そう言つてまるい物を遠くへと投げる彼。

「さつさと消えろ！」

ガシャン!! と、門が閉まる。

どこだろう？

暗い中、投げられた饅頭マントウを探す。

饅頭？

腰を屈めて、必死に探す子供。

この子供は僕？

あつた。

見つけた、饅頭マントウ。

泥を落として、早速噛り付く。

石のように硬い。けどおいしい。

硬い。おいしい。

そう、饅頭は硬いけど、おいしいんだ。

もう家に帰ろう。

そして、早く寝よう。

明日も……水を汲まないと……。



~~~~~

何週間水を汲み続けたのだろうか？ 何ヶ月水を汲み続けたのだろうか？

頭は相変わらずもやもやしたままだ。

何か思い出せそうで思い出せない。

「おい、ついてきなさい」

水を瓶かめに入れている最中に、村長さんから声をかけられた。

慌てて、残ったもう一個の水が入った桶に目をやる。

「ほおつて置いていい。ついてきなさい」

村長についていき、お屋敷の中に入る。

初めて入るお屋敷にちよつとドキドキ。

キョロキョロしながら村長の後をトコトコ歩く。

——やがて、大きな部屋へと入った。

「これがそうか。……ずいぶんと気味の悪いガキだな」

部屋の中に居たのは、青いチャイナ服を着た、サングラスをかけた人。

やけに高級そうな服だ。

「これじゃあ……出せて精々二百ゼニーつてとこだ」

夜になって、大きなおじさんがやって来た。
饅頭まんとうをみんなに配ってくれた。

やわらかい、饅頭だ。

とてもおいしい。

……うれしい。

~~~~~

あれから四日経った。

毎日何人もの子供が来て、あんなに広かった部屋が人で一杯。

そして、毎日やわらかい饅頭がもらえた。

ここは天国だ。

しあわせー。

今、知らないおじさんが石で作られた段差の上に立っている。

部屋の片側に、大きな石の段差があるんだ。

うん、高さ1m、面積は縦1m×横5mってどこかな？

ん？ いち……めーとる？

まあ、とにかく、知らないおじさんがそこに、上<sup>のほ</sup>ったんだ。

いつもやわらかい饅頭をくれるおじさんとは……違<sup>ちが</sup>う人。

「今日から君達は武術を習う事になる。脱<sup>だつ</sup>落するヤツはどんどん処分<sup>しょぶん</sup>していくから、心して取り組め」

ちよっ！ ま！ 処分<sup>しょぶん</sup>つて！

しよぶんつて……何？

「基礎体力をつけさせる。二十の班に分ける」

「は」

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

二カ月くらい経<sup>へ</sup>った。

あれから毎日、基礎体力<sup>きそたいりき</sup>？ を付ける為に、みんなで走り回<sup>まわ</sup>ってる。

夜には馬歩<sup>ばほ</sup>をやるんだ。

これも基礎体力<sup>きそたいりき</sup>なんだつて。



みんな辛そうにしている。

スペックの高い身体でよかったー！　これって空気椅子じゃん！

空………気？

あ、斜め前にいた子が倒れた。

気絶してるみたい。

黄師父ホアンと王師父ワンが気絶した彼を引きずっていく。

連れて行かれた子はほとんど戻ってこない。

どこいったんだろう？

処分だよ！　処分されたに決まってるだろ！　だから頑張れ！　僕！

しよ………ぶん？

もうしやべるなお前は！　って言うか僕は！

ピッ！

笛の音が鳴った。

今日の馬歩はおしまい。

この後はやわらかい饅頭マントウの時間だ。

やったー！

「お？　また残ったか。　やるじゃん、白いの！」

饅頭が沢山入った桶を持って、厨房の陳ツエンさんがやってくる。

そう。僕、みんなと違ってとても白いんだ。

顔も、腕も、身体も。

「ほおら、鼻屑だ！ でかいのをやる！」

わーい！

~~~~~

~~~~~

もうここに来て大分経つ。みんなが言うには二年なんだつて。

こつそり聞いたんだ。

みんな、あまり僕に近寄らない。何でだろ？

そりやあなあ……。僕って白いし、いくら走っても息一つ切らさないし、白いし、表情動かないし、白いし……。みんなきつと、気味が悪いんだよ。

キミが……。わるい？

でも僕、動くのが好き！ 武術するのが好き！

そうだ、厨房に行かなきゃ。陳さんツエンがこつそり花巻ホアジエンをくれるって言ってたんだ。僕、饅頭マントウよりも花巻の方が好き！

厨房に行く為に、こつそりと師父達の部屋の前を通っていくけど、僕は隠れるのがすごく上手いんだ。

なんだって気を消してるからね！

「餓鬼の数も二十分の一以下に減ったことだし、もうそろそろ次の段階かねえ」

あ、黄師父ホアンがいる。相変わらず見事な禿頭はげだな。

ははは、ハゲー！ ハゲー！

僕もだよ。

ううん、違う。生えてる。

一本は生えてるって言わないんだ！

「ああ……、目の前で殺しを実演し、実戦がどういふものを理解させてやる必要がある」

「それで？ 生贄は？ どつかから攫ってくるか？」

「冗談はよせ。ここがばれたらどうする？ ……まあ、適当に餓鬼共の中から選ぶさ」

うわあ……、ブルブル——。

なんつちゆう怖い会話を……。

花巻！ 花巻！

はいはい、食い気食い気。

~~~~~

今日も今日とて武術の時間。

みんな整列して一通り型をやった後、黄師父が前に出る。

「今日は実戦の看取り稽古を行う！ 実際の戦いとはどういうものなのか、しっかり見て身に刻んでおくように！」

そういう黄師父の手には一振りの曲刀。刀身は厚く、いかにも人を切り易そうな角度に歪曲している。

……くわばら、くわばら。

「そうだな——」

言いながら僕達を見回す黄師父。

いったい何だろう？

花巻おいしかったな。また食べたいな。

あ、師父が僕を見て笑ってる。

て、おい！ やべーよ！ ロックオンされてるよ！
ろ、ろつくおん？

「白いいのでいつか。脱落しても娼館に売れそうにねえし」

おいおい、そんな理由!?

しようかんつて何だ うるせー！

「おい！ 白いの、前に出ろ！」

周囲を見回すと、六人の師父達が睨みを効かせている。
にげられない。

「まあ……、一応、構えとけ」

うん、構える。いつも習った通り。

くそつ、なんとか活路を。

「そんじゃ——」

うおっ！

頭を下げる。そのスレスレ上を横に通過していく曲刀。

「ほお……一丁前に避けやがった」

くそ！ 速い！ 7 mある距離をコンマ1秒で0にしやがった！

「ほれ、次いくぞ」

左下から右上への斜め切り上げ。何とかバックステップで刀身をはずす。

師父はそのまま曲刀の持ち手をひねりながら一步前へ、こめかみを狙う横薙ぎ。再びぎりぎり頭を下げたてで躲す。

後頭部に熱さと金属の冷たさ。少し皮が削られたようだ。

あわわ、どうしよう。

いいからよく見て避けるんだ、僕！

うん！ よく見て避ける！

「ほらほらほら」

流れるような斬撃。銀色の線が縦横無尽に走る。

今はまだ何とか避けられてはいるが、向こうの底が見えない。きつともつと速く出来るのだろう。

そしてリーチは圧倒的に不利。こちらから攻撃できる隙間は全く見当たらない。

「そらそらそら」

右、下、右、左、左。

右足を少し後ろに下げて足元への斬撃を避け、そのまま片足で大きく左後ろへジャンプ。

取り敢えず距離がとれたのはいいが、このままじゃあギリ貧だ。

「ほう、よく避けるじゃねえか」

感心したように言う黄^{ホウ}師父。

やったー！ ほめられたー！

しかし僕は見逃さない。師父の禿頭に浮かぶ血管、所謂”ピキツマーク”を。

「もういいだろ、そろそろ死ねや」

曲刀を持った右腕を大きく左に曲げ、右半身をこちらに向けた構え。

この体勢から繰り出されるのは確実に右斜め切り上げ。

本気のスピードが来る。避けられるかは分からない。

ならば！

「お」

相手に合わせて、

「らあー！」

こちらも突つ込む！

繰り出すのは人体で最も堅牢な部位での攻撃！ 即ち頭突き！

目標は半ばまでしか振り切れていない、右腕上腕部！

「やあっ!!」

思わず声を上げる！

全身全霊の気合を込めた声だ！

「な」

全てがスローモーションに。

向こうの踏み込みとこちらの飛び込み頭突き。それに挟まれる形となった右腕。師父の右腕に接触している僕の頭に、メキメキと、その破壊される音が響く。

腕はゆつくりとあり得ない方向へと曲がつていく。落ちていく曲刀。

跳ね上がる膝。

え!? 跳ね上がる膝だっ!?

師父の右膝みぎひざが僕の腹部を直指して突き進む。

空中にいる僕には避けようがない。

「ぐほ」

ダメージと共に、さらに滞空時間を延ばす僕。

左手を少し下げ、未だ空中にある曲刀を掴む師父。

手首を返し、刃を僕に向けると、そのまま切り上げる。

ダメだ。

死ぬ。

死んじやう。

死にたくない。

まだ死にたくないよ。

徐々に近づくと刃。

空中でジタバタする。

無意味に両手を突き出す。

やめろ！

やめて！

頼む！

おねがい！

どっかいつてくれ！

こないでー！

あつち

「いけー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！」

目の前が真っ白になった。

僕は……死んだのか？

「ふげっ」

衝撃が身体全体を襲う。ん？ なんだ、これ……地面？

どごーん!!

岩の碎ける音が、遠くから聴こえた。

いったい何が？

恐る恐る目を開く。

黄師父^{ホアン}は……30m離れた場所にある頑丈な石壁に、めり込んでいた。

「ほう……、ちようのうりよく……というやつかのう」

誰かの声が、聞こえたような気がした。

目の前が暗くなつていく。ダメだ、緊張の連続だったんだ。もう意識を保てそうにな

い。

こうなつてしまつたらもう寝るしかないな……。

うん、僕、寝るね。

ああ、おやすみ……—

~~~~~

目が覚めたら、三対の目が僕を見ていた。

あ、最初の日に喋ってた人—。

石段の上でな。それに師父が二人か。

なんだろう—？

「ようやく起きたか」

そう言つて背を向ける最初の日の人。

多分お偉いさんだよ。お偉いさん。

おえらいさん—？

「すぐに立ち上がつてついてきなさい。さるお方がお前に会いたがつている」

師父二人に引き吊り起こされる。

大丈夫、僕、一人で起きれる。

「まったく、お前ごときをお目に留めるとは……。いいかね、これはとても光栄な事なの

だよ」

前を歩きながら呟くお偉いさん。

師父二人は僕の後ろ、左右二方向を固めながらついてきてる。

お偉いさんが階段を上る。

ダメ、階段は上つちやいけな。いっばいっばい打たれる。

「大丈夫だ。いいからついて行け」

後ろから師父の声が。

大丈夫？

向こうからいいって言ってるんだ。ならついて行こう！

うん！

うう……、何だかまた頭がふらふらしてきた……。

いつものように少し感覚がなくなった頭を抱え、特に何事もなく二階に上がる。

一杯扉が並んである中、一番大きなものを開いてその室内へと入って行くお偉いさ

ん。

その後について僕も部屋へと入る。

うわあー、すごい。よく分からないけど、豪華！

貴賓室ってどこかな？

きひんし……うわあ！ テーブルの上に料理が一杯！

ターンテーブルの上に中華……か。うまそうだ。

うー、おいしそう……。

「ひよつひよつ、涎を垂らしおつて」

横から声が聞こえてくる。

でも僕の目は料理に釘付け。

「よいぞ。好きなだけ食え」

わーい！

テーブルに駆け寄り、手づかみで料理を食べる。

みんな見たことない。

中華だな。

うん、ちゆうかだー！

はぐはぐはぐ。

もぐもぐもぐ。

「ひよつひよつひよつ、慌てて食べておるわ。おい、館長。コヤツ、名は何と言う？」

「いえ、名は与えられておりません。元々無かつたそうで……」

はぐはぐはぐ。

もぐもぐもぐ。

なんだろ、これ？ 皮の中にお肉と野菜があつて……おいしい。

餃子だ餃子！

うまいなー！

「ほう、餃子が気に入ったのか……。——よし！ ならばお前の名は今日からチャ

オズ、餃子チャオズじゃ！」

え？ そんな投げやりな……。

なまえ？

「いくらなんでも、食べ物の名というの……」

「いいんじゃないよ。名は適当な方が大成する。うちにいるもう一人も食い物の名もんじゃしな」

「はあ……なるほど……」

いや、なるほどじゃなくて、もっと頑張れよー。

もぎゆもぎゆもぎゆ。

美味しい！

「こら、何時までも食べてないで、挨拶くらいしなさい！」

ん？ あいさつー？



## 第貳話 車は揺れるよ、コトコトと

僕は今、やけにレトロな車に乗っている。

助手席には鶴仙人様が鼻ひげをいじりながら腰掛、運転手は知らない人である。

僕は広い後部座席に座り、小さい身体を更に小さくちぢこませていた。

整備されていない地面を走っている為か、時折コットンコットンと車が揺れ動く。

——— 思う。

何でこんな事になったのだろうか。

僕は受験を控えた中学三年生だ。

それはついこの間の事のようにであり、ずいぶんと昔の事のようにも思える。

あるのだ。

記憶が。

今さつき名づけられたチャオズという名の子供として、生きてきた記憶が。

僕、チャオズには親がいなかった。

とはいえ、乳飲み子が独りでに生を繋ぐことが出来るはずもないので、まあ、きつと

ある程度の時期までは世話をしてくれた人がいたのだろう。



しかし少なくともそれは、僕が世界を認識し心に留めることができる年齢——いわば物心がついた頃にはいなくなっていた。

所謂孤児というやつなのだが、それはこの世界、とりわけ僕がいた町においてはそう珍しい事でもなかった。

町には僕のような孤児が満ち溢れていた——と言うのはさすがに言い過ぎにしても、少なくとも少数ではなかった。

さて、当たり前のことなのだが、人は生きていく上で食料を必要とする。

そして親のいない僕らにとって、それを得られる場は少ない。

残飯が出るような高級飯店のゴミ箱をあさるか、微妙に心に余裕を持っている中間層よりちよい上の人たちが集まる広場で乞食をするか（因みに富裕層は完全にこちらを汚物扱いでするので何も貰えない）。

そんな数限りあるエサ場を守る為、路上に生きる欠食児童達はコミュニティーを作り、組織的に活動していた。——自らの縄張りを守り、外敵を排除する。拙いながらも組織としては当然のことを行っていたのだ。

その為どこかのコミュニティーに属さない限り、食料調達は困難を極める。得られずすぐに組織立った奴らに奪われてしまうのだ。真まこと、弱肉強食であった。

ここで、話は僕の外見に行き着く。この真っ白な見た目は別に昨日今日なった訳では

ない。

——まあ、ようするに、どのコミュニティからも溢れたのだ、僕は。

町での食料調達を諦め、山に入ったのはいつからだっだろう。

実りの多くある山ではない。

草を食<sup>は</sup>み、木の根を齧り、虫を呑み込んだ。そんな生活を、一年近くしていたと思う。あまりに食料が少な過ぎた為、大型の獣がいなかったのは不幸中の幸いだっただろう。とは言え、あんな環境でよくぞ生きてこれたものだと自分でも不思議である。

——村を見つけたのは偶然だった。

あの時、久々に会う人間に歓喜したかどうか、記憶は定かではない。

しかし、とある村民の足に縋<sup>すが</sup>りついたのは、今でも鮮明に覚えている。

——いつの間にか、小屋が与えられていた。

あちこちに穴が開きまくった隙間風どころではないボロ小屋であったが、気味の悪い余所者の餓鬼には最高級の待遇だったのではないだろうか。

だからあの村に対して、悪い感情はない。

まあ今となっては、あの扱いに思うところがない訳でもないのだが……それでも感謝の気持ちの方が勝る。

山での生活はまさしく、地獄だったのだから。

こうして地獄から天国へと移住することに成功した僕に転機が訪れる。中学三年生としての僕の自我が生まれたのだ。

実際どのようなようにしてそうなったのかは分からない。

中学三年生の僕が死に、無事輪廻転生を経て今の僕となり、それが何らかのきっかけで前世の記憶を思い出したのかもしれない。それとも、何らかの事故により（どんな事故だよ!?）僕の精神がこの真つ白な子に憑依したのかもしれない。

きつと考えて分かることもないのだろう。

この頃から僕の脳内は大分カオスなことになっていた。

異なる人物の知識を受け入れ切れなかったからか、僕は夢遊病患者のように始終フラフラしていたのだ。

因みにここで言う知識には中学三年生である僕の人格も含まれている。人格とは知識によつて構成されているものであるからして、当然と言えるだろう。

そんな感じに二つの人格がくっ付いたり離れたり、片方が消えそうになったり、両方が対消滅しそうになったりと誰にも見えない場所でやけにドラマチックな展開を繰り広げ、二年近くが過ぎる。

現実世界の僕は只ひたすら水を瓶かめに貯め続けるという素敵なお仕事に邁進していたのだが、どういう話の流れからか、あの寺院に売られる事となった。

まあ寺院と言つても、實際寺院を隠れ蓑とした鉄砲玉養成場といった所だろうが。またまた同じことを言うようだが、売られた事に關しても怨みはない。

なにしろ寺院での暮らしは村のそれに比べると、天国と地獄だったのだから。

そう、再び僕は地獄から天国へと移住することに成功したのである。

いやまあ、特に僕自身何もしないけどね。

この頃になると、僕の人格はある程度安定するようになっていた。

相変わらず二つの人格がくっ付いたり離れたりしていたけれど、どちらかが消えそうになるということはなくなっていた。

——寺院での生活は樂を極めた。

周りが次々と脱落していく中、厳しいはずの訓練を容易にこなしていく僕。

この段階になって、ようやく自分の基礎能力が平均のそれよりも圧倒的に優れている事に気づいたのだ。

そして中学三年生である僕がこれからの生活にある意味樂觀視し始めたところで、先日  
の事件である。

……まさか、肉案山子かかしに選ばれるとは……。

とは言え、瓢箪ひょうたんから駒こまと言うべきか、それとも人生成るように成ると言うべきか——。

………いいかげん回想と言う名の現実逃避はやめよう。

目の前の助手席に座っている人物。まさしくドラゴンボールにおける鶴仙人である。そして僕チャオズ。

……………。

……語るべき言葉が見つからない。

まあ、つまり、そういうことなのだろう——。

あまりものシヨックからか、僕の人格が完全無欠に一つに統合されたことをここに特筆しておこう。

これから僕は鶴仙人（大金持ち）の家に住み込み、使用人のように彼の世話をしつつ武術を習っていくだろう。内弟子というヤツである。

山で雑草の毒に中つてあたころごと地面を転げ回っていた頃と比べると大出世であり、むしろどこの勝ち組だよ!?!と嫉妬のこもった言葉と共にうらやましがられる立場にあるんじゃないだろうか？

つまり都合三度目の地獄から天国への移住がまさに今、現在進行形で果たされている訳だ。

そして、ここがドラゴンボールと言うやけに死亡フラグ満載な世界であることが判明し、「どつ、どおーしようー」と頭を抱えて悩むべきところであるはずなのだが、僕はチャオズである。



「着いたぞい」

車から降りる鶴仙人様。ボタンツとフロントドアが閉められる。

「これ、ちぢこまってないで降りてこんかい」

「うん」

一言返事をしてドアを開ける僕。

「うんではない。はいじゃ」

「はいー」

「うむ、よいよい。素直でよろしい」

そう言つて背を向けて歩き出す鶴仙人様。いつの間にか門は門番によつて大きく開かれていた。

僕はあひるの雛ひなのように、鶴仙人様の後に続いてひよこひよここと歩き出す。

高い壁の囲いに囲まれた敷地。広い庭は景観の為に植えたであろう樹木があちこちに点在し、それら全てが山水画風に剪定されている。遠くには湖と見紛うばかりの広い池があり、蓮の花らしきものが水面に浮かんでいるのが見える。

邸宅まで続くと思われる石畳を踏みしめること五分。ゲーンと目の前にそびえ立つのは中華風建築物。残念ながら、あまり建築関連に対し興味を持った事のない前世であつたので、中華風建築物としか説明のしようがない。ただまあ……とんでもなく広い

事だけは僕にも分かった。

「おい、耳無し！ 耳無しはおるか?!」

「はい、ここに、鶴仙人様」

そう言つて、小走りで屋敷から出てきたのは痩せぎすな老人。

彼は片膝をつき、両手を深く下げた頭の上で組んでいる。

よく見ると、鶴仙人様がそう呼んだように耳が両方とも見当たらない。

「天はどこにおる?」

「はい。天津飯様は練武場にて稽古の最中でございます。呼んで参りますか?」

「ふむ……、いや、わしから行くう」

そのまま屋敷に入り、廊下を歩み進めること一分。

何度も角を曲がったり、渡り廊下に出たり、また屋内に入ったりと、もう今どこに居るのかさっぱり分からない。鶴仙人様について行けばいつかとばかりに脳内マツピングを放棄する僕。

——しばらくすると、外に出た。

ここが練武場なのだろう。だだっ広い空間に砂の地面。大きさまざまな岩が点在している。他にもアスレチックにも似た用途不明の——といっても修行に使う物なのだろうが——小さなフィールド多数があちらこちらにあり、カンフー映画的な雰囲気漂



わせていた。

「お帰りなさいませ。鶴仙人様」

すぐこちらに気づき、抱拳礼をする青年。

年は十四、五くらいだろうか。少し汗の浮かぶ筋肉質な身体に、額の第三の目。

まあ、言わずと知れた、天津飯である。

「頑張っておるようじゃのう」

「はっ」

返礼もせず、手を後ろに組んだままの鶴仙人様。

「ああ、楽にしてよい」

「はいー」

そう言つて天津飯は手を後ろに組み、”休め”の姿勢をとる。

「ほれ、ここに居る白い小僧、名は餃子チャオズと言う。今日からお前の弟子おとうとでしじゃ」

「弟子おとうとでし……でございますか？」

「うむ。慣れるまではお前の部屋に住ませる。面倒を見てやれ」

「はい。かしこまりました」

「あとはまかせる」

言つて踵を返す。

「鶴仙人様！ ……………どうして、僕を？」

思わず声を張り上げ、去ろうとする恩人に質問を投げかける。

立ち止まる鶴仙人様。

「それはのう、お前が超人だからじゃ」

振り返らずに話しを続ける。

「そこにいる天津飯もそうじゃが、突然変異か、はたまた先祖返りか、この世にはたま〜にお前らのようなものが現れる。——将来わしの役に立つと判断して今のうちに唾をつけておく、それだけのことじゃ」

「僕……………」

確かに身体能力はそれなりに高いとは思ったけど…………。

「あの日お前が戦った黄燕<sup>ホアンイェン</sup>。あやつは幼き頃より三十年間武術を続けておった。それなりの修羅場も幾度か経験しておる。それを修行期間僅か二年のお前が倒したのじゃ。十分見初<sup>みそ</sup>めるに相応しい理由じゃろうが」

そう……………なのか？

「もうよいな。早くここの生活に慣れよ。そのうち、わし直々にお前に稽古をつけてやろう」

鶴仙人様は立ち去る。

冷たい空気が首をなで上げ、身体を震わせた。今は冬である。

いつの間にやら夕日は西の山に半分沈み、練武場を赤く染め上げている。

そろそろ何か話そうと考える僕に、先にコミュニケーションを図ったのは天津飯。

「餃子……と言うのか？」  
チャオズ

「はい」

「俺は天津飯と言う、今年で十四だ。——チャオズは、いくつなんだ？」

「多分、八つ」

「……そうか。」

「これからは同門だ。何かあったら遠慮なく俺に言ってくれ」

「うん。」

「ありがとう。天津飯さん」

「ああ。——近しい人は俺を天と呼ぶ。同門と言えば家族同然でもある。もつと楽にし

てくれ」

「わかった。……天津さん」

「よし！ これからチャオズの暮らす部屋へ行こう。ついて来てくれ」

「うんー！」

天さんに連れられたのは練武場からすぐ近くの部屋だった。

さつと中を眺めたところ、生活に必要なと思われる物がほぼ揃っており、面積もなかなか広い。

「方、方はいるか!?!」

小走りで部屋に入ってきたのは天さんと同じ年頃くらいの女の子。黒い髪を頭の左右にまとめ、両側に一つずつお団子を作っている。

「Y?のヤーホアン、シャオファン小方だ。俺達の身の回りの世話をしてくれる。方、彼は餃子フアン、チャオズ。今日から俺の弟弟子となる。世話してやってくれ」

初めてリアルで見えるお団子へアーに内心感動を覚える。すばらしい!

天さんはそんな僕の紹介をテキパキと済ませていく。

紹介された彼女、小方シャオファンはにこにここと笑みを浮かべながら、何度も頭を下げていた。

小動物ちつくな動きに、なかなか可愛嬌のある容姿である。

「方ファンは言葉を話せない。耳はちゃんと聞こえているから、何があれば言い付けるといい。

……いじめないでやってくれ」

もちろんだ。女の子をいじめる趣味はない。

「うん、わかった!」

再び天さんは小方シャオファンに向き直る。

「方ファン、物置から床のカプセルを一つ出してくれ。それから布団ももう一組頼む」

大きめに頷いて、駆け足で立ち去る小方シャオファン。言われた通りの仕事をしに行ったのだから。

「さて、もうすぐ日も暮れる。今日はもう夕食を食べたら休むといい」

ん? 夕食?

「わーい! ご飯!」

~~~~~

夜。

早々に照明を消し、床に入る。

この部屋にはテレビなどの娯楽用品がなく、飯を食ったらもう寝るしかないようだ。

「……ねえ、……天さん」

薄暗い中、隣の床ツウアンに寝る天さんに話しかける。

「どうした？ 眠れないのか？」

「天さんも、……鶴仙人様に拾われたの？」

——しばらくの沈黙。

「……………ああ、俺は十二の頃だった」

「そう……………」

「……………あの頃は、酷かったよ……………」

生きるのに……………とにかく必死だった」

「……………」

「裏通りでごみを漁って……………」

—— 鶴仙人様に出会うまで、名前すらなかったんだ」

「うん」

「餓死寸前の俺に、鶴仙人様がごちそうしてくださった。……………天津飯を……………泣きながら

食べた」

「うん」

「俺の身体能力を買ってくれて、お前なら世界一に成れると、そう仰ってくださいました。

……………それまで、誰にも見向きもされなかったこの俺に……………」

「僕も、今日言われた。すごいって」

「……………」

「……………」

そしてまた、しばしの沈黙。

「俺は、あの天津飯の味を忘れない」

「僕も餃子、おいしかった！」

「———恩返し……………しないとな」

「うん！」

第参話 技を極めよう、静々と

「どこかの体力馬鹿の亀と違って、鶴仙流の全ての技の根源は“氣”の流れを操ることにある。

”氣”とは生物の体内に秘められた力の奔流。身体強化しかり、気功波しかり、まずは“氣”の操り方を覚えないう限り話しにならない」

この場所で暮らし始めて二月近く経過ふたつきしていた。

天さんによる体術指導がこれまでの修行であつたが、本日は待望の《鶴仙人様直々の修行・初》である。

「人の肉体と言う物は鍛えるにしても限界がある。だがこの限界を容易く超越させるものが“氣”じゃ。——天津飯含め、お前の肉体は元々通常の人間よりはるかに強い。これ以上無理に鍛える必要もなからう。元来肉体を鍛えて得られる力など、微々たる物じゃからな。

………まあ、どこかの前時代的な脳筋亀はこればかりやつとつたがなるほど。

亀仙人とはこんなところにも思想の違いがあつた訳だ。

「まずは自身の体内に眠る”気”を感じとる修行から始めよう。

——ではチャオズよ、胡坐あぐらを組め」

「はい」

今僕が講義を受けている場所はいつも使う室外の練武場ではなく、室内にあるお堂だ。

目の前には六本の腕にそれぞれ違う武器を持つ高さ6 m程ある阿修羅像が、”デー”とかっこいいポーズで構えていた。

それにしても自宅にお堂やら仏像やらがあるとは……。

僕はまだまだ鶴仙人様のお金持ちっぷりを嘗なめていたらしい。

「心を落ち着かせ、体内に存在する気の流れを感じ取るんじや。焦らず、時間をかけてよい。

だが、けっして無になるでない。気とは生命の息吹——」

「あの」

「なんじや？ 話の途中じゃぞ」

「あの、僕。自分の体内の気、わかります」

「む？」

「気、消せます」

そう言う僕を疑心暗鬼な表情——サングラスを掛けてあるので雰囲気から察した想像だが——で見下ろす鶴仙人様。

「……ふむ、ならば消してみい」

「はい」

ふっふっふ、驚愕するがいい！

すく、ふく、と、深呼吸を一つ。

体内を流れる気の力を生命維持に必要な分のみ残し、”無”に近づける。

「ほう……」

今の僕は極限までに存在感が薄くなっていることだろう。

部屋の隅っこにでも立っていれば、常人にはけっして見つかからない自信がある。

「まだまだ詰めは甘いようじゃが………確かにすばらしいおんぎよう隠形じゃ」

「へへへ」

鶴仙人様のゴツンと軽いゲンコツ。瞬間星が見えた。

「調子に乗るでない！ まだまだ詰めが甘いと云うとろうが！」

「うく、はい」

実はこれには自信があつた。

寺院にいた頃は毎日のように師父達に気づかれず、こつそりと厨房まで行っていたの

だ。もちろん最初からうまく行くはずもなく、始めの頃は何度も見つかつては折檻を受けていた。だがそれでも決して諦めず、毎日毎日挑戦を続け、結果、ハイレベル——武術の達人たる師父達に見つからなかったのだから、十分ハイレベルと言えよう——の気消し術、鶴仙人様の言を借りれば隠形術を習得することに至った訳だ。

自分で言うのもなんだが、真、食意地とは恐ろしい物である。

「とは言え、自力でそこまでに至ったか……。恐ろしい才能じゃのう」

「えへへ」

「だからへらへらするでない！

——第一段階は飛ばしじや。

次は気の流れの向き、強さ。これを感じ取れるようになってもらう」

「はいー」

「ふむ………これだけ才能があるなら、もっと手っ取り早い方法で行こうかのう……。

よし、チャオズ！ 手を出せ！」

言うとおりに左手を差し出す。それを掴み、引つ張り上げる鶴仙人様。

「もう胡坐はよい。立てい。

——今からわしの気を大量に流し入れる。そら、いくぞい！」

唐突に鶴仙人様に繋がれた手から大きな熱の塊が入ってきた。

いや、鶴仙人様が流し入れてるんだ。こ、これが”気”!
「落ち着けい。」

時間をかけてゆつくりと押し込んでやる。気の通る道を感じよ」

「う、うん」

「はい、じゃー!」

「は、はい!」

「なんなら目を閉じよ。その方が感じ取りやすい」

「はい!」

左手から流れ込む熱。

それは左腕を通り、身体の中心へと向かっていく。

そしてそのまま左腿から左足。

戻り、股間を通過して右腿、右足。

もう一度中心を通って右腕、右手。

またまた戻って、首を上り頭へと。

最後に熱は左手に帰還。

「一周したようじゃな。どうじゃ、チャオズ。気の流れ、通り道を感じとれたか?」

「た、たぶん。何となく、分かります」

” 気の通り道、” という意味が分かった。

” 氣” はまるで血液のように、決められた経路を伝って全身を回っていたのだ。

「ならば反復じゃな。安心せい、今日一日は付きおうてやる。

ほれ、もう一度行くぞい！」

「はい！」

~~~~~

僕の右手に気を流し、ゆっくりと体内に押し込める作業。

鶴仙人様は宣言通り、延々とそのルーチンワークを何時間も続けた。

「はあ……はあ……」

この鶴仙人様の初修行により、僕は多くのものを得ることが出来た。

とりあえずこの” 氣” を流し込まれ続けると言う行為。なんとも無いと思われるかもしれないが、酷く体力・気力双方を削られていく。

僕がまず学習したことは、これであった。

「もうそろそろ限界かのう？」

今日はここら辺でやめじゃな」

「はあ……はい。」

あ、あの」

どこかへ行こうとする鶴仙人様を慌てて引き止める。

ここ二ヶ月顔を突き合わせて分かったことなのだが、この鶴仙人様、あまりにも雷動風行すぎる。思ったこと、言ったことを行動に移すのが兎に角速い。思い立ったが吉日ならぬ、思い立ったがこの瞬間である。質問をしたくともいつの間にか居なくなつていた、なんてことが幾度かあつた。

「なんじゃ？ 何か気になつたことでもあるなら言うてみい」

立ち去ろうとするその歩みを一旦止め、振り返る鶴仙人様。

僕は慌てて言葉が続ける。

「鶴仙人様の気が通る時、ほかよりもとても熱い部分がありました」

「……ほう」

「<sup>てのひら</sup>掌と足の裏、あと、お腹が、熱かったです」

感心したような顔で、顎髭を撫でる鶴仙人様。

そのまま僕の問いとすら言えない報告のようなものに答えを返す。

「今お前の言うた場所は、”気”を集めやすい部位である。」

——どれ、見よ」

鶴仙人様は右手を胸の高さまで持ち上げると、てのひら掌を天に向ける。

周囲の空間が歪んで見える。そう、錯覚するほどの集中力。

ぼうわっ

擬音にすればこんな感じだろうか？

鶴仙人様の掌てのひら 上空6cm程に、野球ボール大の光球が浮かび、静止していた。

「これが集められ、束ねられた”気”じゃ」

特に自慢でもないが、僕はドラゴンボールと言う漫画を全巻持っていた。

ここでは雑魚含めほぼ全キャラクターがオールマイティに扱える”気”。

ここに来てようやく気づく。

僕はこの偉大なる功夫クンフに対し、どこか軽く見ていたことに。

「気の放出。

どの流派においても”奥義”とされる技じゃ」

昔、静電気を使って小さな雷を起すという理科の実験をやったことがある。その時のことを深く連想させる。

白く発光し、脈動する気の塊。ジツと見ていると魂ごと吸い込まれそう。

これは、本当にこの世に存在する物なのだろうか？

感じられるプレッシャーとは逆に、ひどく現実感が薄れていく感覚。

こんなこと、人間に出来ていいものなのか？

「お前が掴んだその感覚はのう、本来なら武術家が三十年、四十年とかけて、徐々に培っていくものじゃ。」

——いや、現実、生涯をかけてもそこに至れん奴らは多い」  
自分の両手を見る。

鶴仙人様の言うことを信じるならば、僕にはとんでもない才能があるのだろう。

——いつか、僕にも出来るのだろうか……？

「その感覚を早々に掴んだお前は“氣”の放出に関する才能がずば抜けておる。

その才能だけならば、天以上じゃな。

なにしろ天がその境地に至るまで、一年と三月はみつきかかつとるからのう」

まあ、それでも破格の速さじゃがな。と続ける鶴仙人様。

「ほ、本当ですか!? 天さんよりも才能があるって!」

「ああ、嘘ではない」

これにはさすがに驚愕。

漫画では全てにおいて、天津飯より劣っていたはずの餃子。チャオズ

まさか……こんな才能があつたなんて。

「その才能に驕らず、精進せい。」



お前なら鶴仙流最終奥義まで、あるいは辿り着けるやもしれん」  
踵を返し、去っていく鶴仙人様。

僕はしばらくお堂でボーとしていた。  
考察する。

「どうやら僕には”気”の放出限定だが、天さん以上の才能があるらしい。」

しかし原作のチャオズは明らかに全てにおいて天津飯より弱かった。

では、それはなぜか？

もちろん年齢も理由の一つだろう。

孫悟空と天下一武道会で初めて出会う日付は分からないが、そこまで未来ではないはずだ。

天さんと比べ、修行に費やした年数の違いは実力の差という形ではつきりと現れるだろう。

しかし、その後のチャオズも劇的に強くなったと言うことは無い。  
なぜか？

——”師”の元を離れたからだ。

鶴仙人様の元で修行すべき期間を、独学に費やしたからだ。

一番の成長期でもあるあの年代を、無駄に過ごしたからだ。

「実際、神の神殿で修行するまで、チャオズは大した成長をしていなかったのではないか？」

「武術はパワーだけじゃない。」

「先ほどの、あの気を体内に押し込むと言う未知の技術からもそれは断言できる。」

「鶴仙人様は三百年近く生きていらっしゃるらしい。」

「その間に培ってきた功夫はとても無視出来るものではない。」

「出来れば、鶴仙流は全て習得したい。」

「——今後の方針が大体決まった。」

「まずは“気”の制御を完全にし、そしてなるべく多くの鶴仙流を習得する。」

「原作ブレイクがしたい、なんて夢は僕にだつてある。」

「少なくとも、碌な役に立たないという自身の未来を少しでも変えてみたい。」

「その為にも、今はまず地味に努力だ。」

「うん！ よし！」

「えいえいおー！」

~~~~~

~~~~~

「チャオズ、夜市よるいちに行かないか？」

まもなく晩御飯の時間。天さんからの提案であった。

「お前はまだこの辺をほとんど出歩いたことがないのだろうか？」

ほとんどどころが、まったくだつたりする。

「ここに来てから一度も外に出ていない。」

「いいの？」

「ああ、もちろんだ。」

俺達は別にここに閉じ込められている訳じゃない。外に出たい時はいつだって出て良いんだ。

修行ばかりしていると出不精にはなるがな」

天さんは顔に僅かな苦笑いを浮べる。

「うん！ なら行く！」

「それじゃあついでに夕飯も屋台で済ませよう。方フアン！」

パタパタと慌てて走り寄る足音。

ぐりつとした左右対称のお団子頭を覗かせ、洗濯籠を持った小方シャオファンが玄関から顔を出す。

僕と天さんが住んでいるここは鶴仙人様屋敷の西側にある別館。

弟子専用棟、みたいなどころである。

もつとも今現在、鶴仙人様の弟子は僕と天さんの二人しか居ない。

今住んでいることと同じ様な空き部屋——それなりに豪奢で結構広い——は優に十を超すが、しかし未だもって、僕は天さんの部屋に宿泊している。

違う部屋に住むとそこを清掃する小方シヤオフアンの負担が大きくなるし、どうせ食事も基本天さんと共に摂る。このままの方が色々シヤオフアンと便利なのだ。

「今日の夕飯は作らなくていい。それから出かける準備をしてくれ、一緒に夜市に行こう」

コクコクと頷く小方シヤオフアン。指で洗濯籠かごを指し、そして水場の方角を指す。腿を上げてその場で駆け足をした後、手でごしごしと洗濯の動きをする。最後に洗濯物を干す動き。親指と人差し指に間まを作つて、「ちよつと」という意味のジェスチャー。

「ああ、洗濯物が少し残っているから洗っておきたいのだな。ならそれが終わつてからでいい。待つていよう」

またコクコクと頷く小方シヤオフアン。そして駆け足で水場へと向かつていった。

——さて、先に出る準備だけでもしよう。

「チャオズ、腕を伸ばせ」

いつの間にか天さんが僕の外套を手にしていた。そのまま僕に着付けようとする天

さん。

言われた通り腕を伸ばし、外套に袖を通していく。

胸の真ん中に大きく「鶴」の紋章のある外套である。

「日が沈むと大分寒いからな。襟巻えりまきも着けよう」

続けて、僕の首にマフラーを巻いていく。

天さんは、何と言うか、とてもお兄ちゃんしている。

ご飯を食べればもつと食えとばかりに僕の茶碗におかずをよそい、果物を二つ貰ってくれば必ず大きい方を僕にくれる。風呂に入れば、もつとちゃんと洗ってやると石鹸を押し付け、そして寒い日には……こうして厚着を着せてくる。

「帽子はこっちの、暖かいほうを着けていこう」

少しも煩わしくないとさえ嘘になるのだが、それにしても新鮮な感覚である。

僕は少なくとも六年近く、こういった物とは無縁の生活をしてきたのだ。何を今更という思いと同時に、素直にあり難いとも思う。

何なんにしろ、くすぐったい感覚なのだ。

防寒対策が完璧に施された僕を満足そうな表情で見た後、天さんも自分の外套を羽織る。因みに天さんの外套にも「鶴」のマークが左胸にワンポイントで付いている。

準備が終わったので、小方シヤオファンの様子を見に行こうという話になった。

途中通る彼女の部屋に立ち寄り、彼女の外套を持っていく。

僕達の住んでいる部屋も含めて、弟子専用棟の房間ほうかんには鍵は付いていない。それとこそが、門ドアもほぼ常時開きっぱだ（さすがに夜には閉めるが）。

「プライバシー？ なにそれ、おいしいの？ 状態である。」

さて、小方シヤオフアンは水場にいるのだろう。

もちろん水場、と言つても当然の如く川などではなく、厨房とくつつ付いている水道のある室内である。

灰色のセメントの壁に囲まれた中々の広い空間に、洗濯物を部屋干しするための紐が張り巡らされている。

小方シヤオフアンは水を溜めた大きな洗濯桶でチャプチャプとやっていた。どうやらすすきの段階に入っているらしい。

彼女は僕達に気づくと、「もうちよつと待つて」と軽く手の平をこちらに向ける。

ぎゅぐつと白い布を搾り、

バン、バン！ と振つてしわを伸ばし、目の前の紐に掛ける。

洗つていたのは僕達がいっつも汗を拭くのに使うタオルだったようだ。今掛けたタオルの隣にも五枚程同じものが干されていた。

「方フアン。丁度終わったのなら行くう」

そう言いながら、小方シャオフアンに外套を渡す天さん。

受け取りながらコクコクと嬉しそうに小方シャオフアン。

さあ、行こうじゃないか。

何年ぶりかの町だ。

~~~~~

この地域(国?)で一般的に言う市場いちばとは庶民ノミご用達の蚤の市ノミのことである。基本、物資流通の八割方がこれで賄われている。大きなデパートも都市中心部にはあるらしいが、とりあえず僕が行ったことがない。

市場いちばは通常、複数軒の商店の集合地を中心に、前述の通りノミが跳ねるように人々が思い思いの場所に売り場を開く。

朝市には主に荷台に積まれた野菜が売られ、夜市には玩具おもちゃ・装飾品アクセサリーなどの雑貨が並ぶことが多い。売っている人も商人くずれから農民まで多種多様で、地面に直接タンズー?子を敷く者もいれば、荷車を改造してそこに商品を並べる者もいる。

乞食をするにも絶好の場所であるとも言っておこう。以前あいた町そこじゃ二つのグルーブが縄張り争いをしていて、とても入る隙間はなかったが……。

そんな市場通りを目指して、僕達はやや速い歩行速度で住宅団地を突つ切る。見えてきたのは横幅約8m、縦幅……ちよつと先が見えない、の長い幌屋根。

「着いたぞ」

天さんはそう言いながら先頭する。その後ろに僕、小方シヤオファンと続く。

「屋台通りは向こう側だな。ここを抜けて行こう」

足を進めた室内市場は——と言つても幌屋根があるだけなので殆ど外なのだが——かなり生臭い空間であつた。

「ここは主に肉類を売っている」

腐つた肉の散乱する地面を踏みしめながら、そう説明する天さん。

その言の通り、市場の両端と真ん中をカウンターが縦に「ずらー」と並び、そこに様々な種類の肉が置かれたり吊るされたりしていた。自然と通路が二つ出来るわけだが、○側通行といった進行方向の決まりは特にないようで、人々は好き好きに行き来している。ちよつとした混沌カオスだ。

——それにしても汚い。

地面には肉やら内臓ホルモンやら白菜の切れ端やらが散乱して二歩歩けば何か踏むような有様で、店頭に置かれた豚頭ぶつちやーや吊るされている豚足の周りには蠅がブンブン飛んでいる。

現代日本人の精神からすればこれはあり得ない、と言うような光景だ。

「方、荷物になるから買ひ物は帰りにしてくれ」

天さんの声にいそいそと羊肉の排骨スベアリフを物色していた小方シャオファンが振り返る。

うゝん。

僕達のいつも食べていたご飯の原料がここから来ているかと思うと少し複雑な気分である。

とは言え、今までの食生活を思うときすがにそう贅沢なことは言えない。

それに今の僕はどこかの新聞記事に書かれた名言のように、「なあに、かえって免疫力がつく」ような環境で約八年も過ごしてきたのだ。とつくに免疫力はついたはずだろう。実際ここ三、四年腹を下した記憶は無い。

さて、僕達にとって生肉売り場は特に面白いわけでもなく、ずんずんと歩いて通り過ぎる。

キヨロキヨロと肉を物色して遅れがちシャオファンな小方には僕が手を繋いで引つ張っている。たまに手の先から”待つて、見たい”と言いたげに手を揺すられる振動が伝わってくる。

「だめ。帰ってから」

僕がそう言うのと彼女は少しシヨンボリした顔で素直に付いてくる。そして少し間が開くと、また僕の手を揺すり始める。

なんのかんで五分ほどで肉売り場を抜けた。幌屋根と生臭い空気が途切れ、空に浮かぶ半月を見ながらちよつとした開放感を味わう。

「ここからは雑貨が多い。何か欲しかったら遠慮なく言ってくれ、俺が買ってやる」「大丈夫！ 僕もお小遣い貰ってる！」

天さんも多分同じだろうと思うけど、僕は毎月3000ゼニーのお小遣いを鶴仙人様から貰っている。この辺に住む人々の平均給料が月700ゼニーらしいので、結構な大金を貰っていることになるのだ。

「それに僕、お腹減った。先に屋台探そう、天さん」「ああ、それもそうだな」

どうもこの体は物欲よりも食欲の方が勝るようである。

これも飢えた過去からの反動なのだろうか？

「チャオズは何が食べたい？」

「うくん……よく分からないから、天さんのお勧めで」

「なら、久々に肉包子パオズにしよう。おいしい店を知っている」

それを聞いて嬉しそうにパチパチと手を叩くシャオフアン小方。

「あそこは方ファンとも以前何回か行ったことがあったな」

しばらく周囲の賑やかな雰囲気堪能しながら歩き、辿り着いたのは規模の大きめな

出店だった。

何段にも重ねられた大きな蒸籠せいろうから湯気がもくもくと天に伸びている。そんな蒸籠が全部で三つ。その手前には粗末な机と椅子が沢山並べられ、裸電球がそれらを照らしていた。奥には掘つ立て小屋の厨房らしきものもあり、その窓から煙突がくの字に突き出され、なぜかもくもくと煙を吐き出し続けている。

ひよつとしたらガスじゃなく、薪を燃やしてたりして……。

「おい、その。肉包子パオズを……何皿でも良いが、この机一杯に乗せてくれ」

「はいよー」

天さんはウェイターに注文をし（↑そんなハイソなものじゃない）、それに応える八の字髭で油污れのたっぷり染み付いたエプロンを身に着けたウェイター（↑何度も言うか、そんなハイソなものじゃない）。

そしてその辺にある机を囲み、僕ら三人は椅子に腰掛けた。

「楽しみにしてくれ、この店はここ界限で一番美味い」

それに続くように笑顔でコクコクと頷く小方シャオフアン。

「へい！ お待ちー！」

声とほぼ同時に机に載せられる皿。いや、”お待ち！”って、ちつとも待つてないよ。

注文から僅か七秒で持つてこられた包子パオズ。タイミングよく丁度あがったのかな？

まあ、一杯蒸してるし。

「旦那、どうでしょう。いい老酒が入ってますが、この肉包子とよく合いますぜ！」

「俺は下戸だ。それより黒酢を持ってきてくれ」

「へい！」

シャオファン

小方シャオファンが笑いを堪えている。天さんは今年で十四。旦那などと呼ばれるような歳じゃない。確かに見た目は通常の十四歳より遙かに大人びてはいるが……。

「ほら、チャオズ。まずはそのまま食ってみる。美味いぞ」

「うん！」

包子を手掴みで頬張る。因みに包子は手掴みが正しいマナーなのだ。

噛んだ瞬間に口内に広がる肉汁。一口、二口と噛みしめる。

味はやや濃く、醤油につけなくともいい濃厚加減だ。生姜が自己主張をし過ぎない程度に効いていて、肉の臭みを見事に消している。肉汁は小龍包のように”ぶわ”っと出るものじゃなく、噛む度に濃厚に口内へと広がっていく感じ。皮はもちもちとしていて、その濃い目味の餡と絶妙にマッチングしている。

なんだ、これは!?! 新感覚! 店はきちやないのにこんなに美味しい。

本当にこれがこのみずばらしい店から生まれたのか!?

「どうだ?」

天さんの問いに答えずに次から次へと包子パオズーを口に運ぶ。

はむはむ、はぐはぐ、あうあう、むしやむしや。

「気に入ったようだな」

そう言つて嬉しそうな天さん。

シャオフアン 小方もここにこ顔で口を栗鼠のように膨らませ、包子パオズーを頬張つていた。

「だからこつちは手前てめえらに守つてもらふ必要なかねえつて言つてんだ!!」

出店の厨房部分から響く大きな怒声。

シャオフアン その声に驚愕したのか喉を詰まらせる小方。必死に食道部分をトントントンと叩

く。

「水！ 持つてきてー！ 速くー！」

叫ぶ僕。

八の字髭のウェイターが慌てて湯ざまし水を持つて来て小方シャオフアンに渡す。

水を飲んで”ふいー”と一息つく小方。

「大丈夫か？」

心配そうに見る天さん対して、こくこくと頷く。

どうやら大事なささうである。

「なんだどつ、てめつ！ つころすぞ！、ツラア！」

何らかの口論が厨房でなされているらしい。

なんなんだろう？ 迷惑な……。

さて、包子包子。

「なんなのだ？ あれは？」

僕の心の声を代弁するようにウエイターにそう問いかける天さん。

因みに僕は再び包子の世界に夢中である。

「町のチンピラですよ。石榴スーリユバン幫バンつて言うらしいんですけどね。何でもよその町で抗争に負けて、幫バンごとこつちに引越してきたつて噂ですわ」

「この町は三暗会サンアンホイが仕切っているはずだが」

「ええ、ウチも三暗会サンアンホイにシャバ代払ってまさあ。だからあの連中はお呼びじゃねえつてことなんですがねえ……」

「ぶつ殺すのはこつちだ！ こちとら十八年前から三暗会サンアンホイに面倒見てもらってんだよ。それをチンピラ風情が日々文句つけやがって！」

厨房の奥から飛び出た何かが二つ隣の椅子に“ビーンツ”と突き刺さった。

出刃包丁だ。

「やんのか！ つらあ！」

「うっせえー！」

ドゴンツ！ という音と共に一人の男が転がり出る。どうやら蹴り出されたようだ。それを追うようにもう一人の男。

そして、中華包丁を両手に一丁ずつ持った筋肉隆々の爺さんが厨房よりのつそりと姿を現す。

「とつとと消えやがれ!!」

唾を5 m程飛ばしながら叫ぶ爺さん。多分彼がここの店主なのだろう。

「つめえ、もう許さねえ！」

地面に転がっている方のチンピラはそう言つて、懐から銃を取り出しながら立ち上がる。相棒に釣られてか、もう一方のチンピラも同様に懐から拳銃を取り出し、店主に向けた。さすがのこれには少し怯む店主。そして僕は一皿目の最後の包子を頬張り始める。

「まづいな」

冷静に言う天さんにアワアワする小方。シャオフアン

「そこの二人！」

声を張り上げながら立ち上がる天さん。どうやら介入するようである。

「その玩具は少々度がすぎている。オモチャ」

今なら殺さないで置いてやる！ 消えろ！」

座っている時に机に隠れていた「鶴」の紋章が頭わになり、それに気づいたウェイターは顔を青くしてブルブルと震えだす。

「ま、まさか、あなた様は」

何これ？ 水戸黄門？

にしても本当に美味しいな、ここの包子パオズ。これをあの筋肉爺さんが作ったってことだよ
ね。

なんか不思議。

「なんだでめえは！ 英雄気取りですか!？」

銃口を天さんに向けながら無防備に近づくチンピラA。

瞬間。

チンピラAは机椅子を薙ぎ倒しながら後方へと吹っ飛び、6 m先にある街路樹にぶつかり、「うぐうつ」という空気が搾り出されるような声と共にやつと停止した。

一体何が起きたのか、まるで理解できないチンピラB。

「まだ殺していない。とつとと連れて帰れ」

僅かに気を開放する天さん。一般人には訳のわからない威圧感として感じ取れたことだろう。

「ひ、ひいつ!」

見事な四本足走法でチンピラAの元に辿り着き、彼を背負うなり一目散に退散するチンピラB。

ん？

シャオフアン

小方が僕の袖を引っ張っている。

彼女は天さんの方を指差し、首をかしげる。

「今天さん、あの人の胸を軽く小突いた」
こづ

そう説明してやるとふんふんと納得する小方。
シャオフアン

「ありがとうござえます、鶴仙人様んところの旦那」

「ありがてえ。本当に助かりましたあ」

天さんに頭を下げるウェイターと店主。

「ああ、こちらも食事を邪魔されて気が立っていた」

「うっ、すまねえ……」

さらに深く頭を下げる店主。

大声で騒いだのは彼も同じだからだ。

「気にしなくとも良い、悪いのはあのチンピラ共なのだろう？」

スリーユバン

石榴幫と言ったか」

「はい、どうも最近やり方が徐々に過激になって来まして……」

三暗会サンアンホイの旦那方にも報告するつもりです。追い出すなり吸収するなりして頂けたら
ありがたいのですが」

三暗会サンアンホイになら任せても大丈夫だろう。

「ご老公は今まで通り美味い包子パオズを作っていていい」

「へい！ 真にあり難いことで」

「もういい、仕事に戻ってくれ」

「へい！」

店主とウェイターは緊張から解放されたような表情で戻っていく。

「ねえ、天さん」

「ん？ 何だ、チャオズ」

三暗会サンアンホイ「三暗会って？」

「ああ、ウチの下位組織、みたいな物だ」

「？ みたいな？」

三暗会サンアンホイ「三暗会は毎月シノギの三割を鶴仙人様へ献上せねばならないが、鶴仙人様には三暗会サンアンホイを経営する義務はない。ただの金づるだな。」

「……いや、そもそも鶴仙人様は上がりの少ない三暗会サンアンホイのことを気にすら留めておられない。と言うことは、さらにそれ以下か……」

うわあ……、ひどい……。

「まあ、ウチに泣きついてきたら……気分がよければ助けてやらんでもないぞ。

そんな関係だ」

「三暗会つて、黒幫？」

「ああ、そうだ」

黒幫を気にも留めない程度の扱いをするウチつていったい……。

「そんなことよりチャオズ、もつと包子パオズを食べ。うまいぞ」

「うん！」

はまはま、むしやむしや。

~~~~~

「どうした？ それが欲しいのか？」

食事の後、僕らは？子タンズーをあちらこちらと回っていた。

各？子の店主達は大声で呼び込みをかけ、まるで喧嘩しているような大騒ぎである。

そして僕にとっては新世界なだけあって面白い商品も多い。

そんな中、とある玩具の？子タンズーにて。

何となく見たそこは幼子の為の玩具を売っていた。きつと僕くらいの子が遊ぶものなのだろう。何となくその中にある宇宙船の玩具を手取る。お尻にボタンが付いていて、そこを押すとブオオオーと音を立てて窓にあたる部分のライトが七色に光る。

異世界でも子供の好みってあんまし変わらないんだななどと考えながらそれを弄くつていると、背後から天さんの声が出たのである。

「ううん、別に欲しくない」

本心である。

僕は立ち上がると別の？<sup>ダンスー</sup>子へと移動していく。

そう言えば小<sup>シャオフアン</sup>方はどこにいるんだらう？ 途中から三人それぞれ好きな物を見に行つたので、今は皆バラバラだ。

しばらく周りを物色しながら、ゆつくりと進む。

皿やら茶碗やらを並べてある？<sup>ダンスー</sup>子から顔を上げると、左前方向に小<sup>シャオフアン</sup>方を見つけた。

なにやら熱心に髪留めの？<sup>ダンスー</sup>子を見ている。手に取っては元の場所に戻しを繰り返して、そしてまた別の髪留めの？<sup>ダンスー</sup>子を冷やかす。

気に入るものがなかったのかな？ とも思つたか、その表情を見ると買う決心が付かないだけのようだ。やはりお給金が少ないからかな？ ……て言うか、お給金、貰つて

るよね？

あれ？ 立場的には奴隷ニアピンだし、ひよつとしたら貰ってないかも……。

彼女は耳無しの爺さんが拾ってきたらしい。

喋れないことを理由に捨てられたのだそうだ。以来、鶴仙人様の屋敷で<sup>ヤーホアン</sup>Y? をしている。

あーなんて悲しい過去！ などとは言わない。

これくらい不幸を持つ子は割と数多くいるのだ。むしろ彼女は拾われただけ幸運なのだろう。

僕と同じ、ね。

~~~~~

もうそろそろ夜も遅い。僕達三人は合流し、帰ることにした。

「ん？ チャオズも何か買ったのか？」

「うん！ 天さんも」

そして小^{シャオファン}方は結局自分のものは何も買わなかったようで、手には網^{あみ}で雁字搦めにさられている生きた鶏を一匹ぶら下げている。逆さまの鶏があちこちと首を動かしながら

コッココッコとうるさい。

僕達は並んで家路を歩く。

平和なひと時である。

「今日は楽しめたか？ チャオズ」

「うん！ また来たい」

「ああ、夜市は毎日やっているからな。また今度来よう」

「うん」

シヤオズフアンが天さんの袖を掴んで揺する。

「ん？ ああ、もちろんフアン方も連れてってやるさ」

~~~~~

優雅な夜の散歩を終えて家に辿り着いた僕達。

そう、いつの間にか僕にとって、ここは家と呼べるようになっていたのだ。

「チャオズ、これが欲しかったのだろう？」

部屋に着くなりそう言って僕に包みを渡す天さん。

首を傾げながら包みを開けると、中には玩具おもちゃの宇宙船が入っていた。

「うん……。ありがとう！ 天さん」

まったく、本当に欲しくなかったんだが……。

さて、それじゃあ僕も。

「これ！」

買ってきた二つの包みを取り出す。

「天さんと小方シヤオファンにあげる！」

僕から受け取った包みを開く天さんと小方シヤオファン。

天さんの包みには帽子。小方シヤオファンの包みには髪留めが五つ入っていた。

因みに天さんにプレゼントした帽子は割りと高級品である。小方シヤオファンへの髪留めは廉価

品だが、そこは数で勘弁願いたい。

「これを……。俺に……。？」

「うん！」

「……。そうか……。ありがとう、チャオズ」

「うん！」

照れ笑いを浮かべ、嬉しそうな天さん。

禿げ頭がちよつと寒そうだからと思つたことは内緒ないしょである。わぶうつ。

飛びついて来た小方シヤオファンに抱きつかれる僕。

どうやら大層喜んでいるようで、毎日家事で鍛え上げたその腕力を如何なく發揮し、そのまま僕を腋わきから持ち上げてぐるぐると回り出す。

やめて、はずかしい。てか酔う。

~~~~~

「そろそろ電気を消すぞ」

「うん、待つて。今行くー」

僕に与えられた数少ない完全なプライベートな空間。その一つがこの引き出し付きつくえの机だ。

その上に、そつと宇宙船の玩具おもちゃを飾る。

——本当にありがとう、天さん。

第四話 飛天昇空、ビュンビュビュン

「わーーーーーい!!」

氣っ持ちいいー!!

すうーーと思いつきり息を吸い込み。

「あああああーーーーー!!」

出せる限り最大の音量で叫ぶ。

こんな状況にあるなら誰だって叫ぶさ。断言するね。

ただいま高度約300m。

僕は自力でこの上空と呼ばれる場所にいる。

鶴仙流招法が一つ。

『舞空術』

薄い膜状の”氣”で身体全体を包み、それを持ち上げることによって飛行を可能とする。

一応放出系に分類される技である。

まさに秘技と呼ぶに相応しい。

この技を習得した時は、この世界に来たことに対し、手放して感謝したものだった。

「おお、戻ってきおったか。」

「……どうやら舞空術は完全にモノにしたようじゃな」

「はい、鶴仙人様」

着地から即座に抱拳礼に移る。

練武場でなぜか鶴仙人様が僕を出迎えていた。

どうしたんだらう？ 今日はいないはずなのに。

「予定より随分早く用が片付いたのでな。お前らの様子を見に来たわけじゃ」

「はい。お疲れ様です。」

「……………あれ？ 天さんは？」

ここで修行していたはずの天さんがいない。僕を呼び戻したのも天さんであるはずなので、影も形もないのは少し不思議である。

「天なら先に昼飯を食いに行かせたわい。」

「……………にしてもチャオズよ……………、お前は相変わらず片言じゃな……………」

言葉には不自由してないはずじゃが……………。などとぶつくさ言う鶴仙人様。

僕は今のところ、ずーっとこの片言喋り、名付けて餃子喋りチキオズで通とおしていた。

自分で言うのもなんだが、僕の本来の話し方は客観的に見ると色々とうざいらしい。

前世でも小賢しいやら、回りくどいやら、子供らしくないやらと散々言われてきたの

だ。同じ失敗を態々犯そうとは思わない。

なのでこの喋り方をデフォルトにしようか一念発起した訳である。

「ところでチャオズ。もう気弾は揺らぎなく作れるようになったか？」

「はい！」

「ふむ。ちよいとやってみい」

「はい」

右手掌を上に向け、集中。

そして間を置かず、僕の掌より10cm上空に青みがかった白の、手毬大の気弾が生まれる。

鶴仙人様の元で修行を始めてからもうすぐ二年。速かったのかそれとも遅かったのか、ようやくこれくらいのこととは出来るようになった。

「なるほど……完璧じゃのう……」

僕の功夫クンフを見て花丸な評価を下す鶴仙人様。

人は褒められれば喜ぶ生き物であるからして、どんどん褒めるべきである。そうすればその分、さらに期待に応えようと努力をするのもまた人だからだ。

つまり僕は褒められてとても嬉しい。

「へへへへ」

鶴仙人様の有り難い拳骨☆

「うう……」

痛い……。

この二年間何度も繰り返し、もはやパターン化したこのやり取り。

鶴仙人様も諦めたのか、呆れ顔でもはや何も言つてこない。

「気を取り直してじゃ、チャオズよ！」

「はい！」

「……よく、見ておれい」

言われて反射的に全感覚を研ぎ澄ます。

鶴仙人様がそう言う時は大抵新技を伝授する時だ。

いつも脈絡もなく唐突に始めるのは正直勘弁して欲しい……。

静かな一呼吸の後、鶴仙人様の身体全体の”気”が一息に、爆発的に増大する。

と同時に右手人差し指を突き出す。

感覚をひたすら鋭く研ぎ澄ませた今の僕には分かる。

ありえないことに、その増大した圧倒的物量の”気”が全て、突き出した指に集まっ

たのだ。

「どどん波!!」

鶴仙人様の気が増大し、それを指に集めて放つまでなんとコンマー秒未満!

放たれた気弾は尾を引きながらビームの様に突き進み、練武場にある岩に接触。そのままその岩とその後ろにある岩を四つばかり貫通し、最後に山の様に積み上がった砂場に突き刺さり、大爆発を起こした!

パラパラと降り落ちる砂を全身に浴び、未だエコーを残す爆発音を耳に響かせながら、果たしてこの音を「ドゴーン」と表現すべきか、それとも「ちゅどーん」と表現すべきかなどと惚けたことを考える。

と、鶴仙人様からお声がかかる。

「全身の細胞を活性化させた上でそこから“気”を一息に搾り出し、それらを指先に集めて放つ。

これが鶴仙流絶招、どどん波じゃ」

鶴仙人様は呆然としていた僕にかまわず話を続ける。

「どどん波の真髄はその技の出の速さにこそある。

そもそも殺し合いにおいては、じゃ」

一旦言葉を切り、手を腰に回して姿勢を正す。

「そこでは常に千分の一秒の世界での判断を強要され、そのいかんによつて生死が決定される。そんな状況において、溜めねば使えぬ技などなんの役にも立たん」

ふむふむ。その為には、速さ……か。

「そしてもう一つの特徴は、その貫通力じゃ」

鶴仙人様は腰に回した手から先ほど技を放った人差し指を前面に出し、上に向ける。

「どどん波は気を集めやすい掌ではなく、指を放出口とする。

それによつて……そうじゃな、チャオズ、どうなるか答えてみい」

「ホースの穴は小さい方が、水の勢いは強い！」

即答する。

波紋と一緒にですね、鶴仙人様！

「その通りじゃ。

その為どどん波は他の気功波と衝突してもそれを貫き、さらには敵を即死させるだけの威力を秘めておる。

自惚れではなく、わしのどどん波こそがこの世で最もバランスの取れた最強の放出系気功であると断言しよう」

おお！

「これがお前の次の目標じゃ。このどどん波を完璧に使いこなせるようにせい。

今日からわしも付きおうてやる。丁度暇が出来た事じゃしな……」

再びおお！

ハンカチを片手に、小方^{シャオファン}は横で僕の口周りを拭いていた。

——正直止めて欲しい。

前々から思っていた事なのだが、彼女は僕をなんだと思っているのだろうか？

口くらい自分で拭けるわい！

「方^{ファン}。ほら、右の端^{ファン}つこにも」

ちよいちよい、ふきふき——。

天さんに言われた通りの箇所を更に念入りに拭いていく小方^{シャオファン}。

あーもう。

天さんも天さんで。

何でこの二人はこんなに過保護なわけ？

「うー」

不満を示す為に唸り声を上げてみる。

うぎあー！

何かが琴線に触れたのか、満面の笑顔で僕に頬ずりする小方^{シャオファン}。

「やめてー」

じたばたする僕。

と言つても、あまり力を入れすぎると彼女を傷つけてしまうかもしれないので、そん

なに暴れられない。

「ハハハ」

そして、そんな僕を見て笑う天さん。

シャオファン

小方の容姿は百人が見れば五十人が可愛いと言い、二十人が綺麗と評し、残った三十人は普通と判断するだろう。要するにクラスにいるちよつと可愛い子レベルだ。

前世における僕は中学生であり、よくある”女子になんか興味ないやい”を表層に出しながらも本当は気になって気になって仕方がなかったりするお年頃であり、そして当然の如く男女のお付き合いなるものを渴望しながらも経験したことはない。

とまあ本来ならこのようにおにやの子に頼ずりなどされたら、心の中でどこかにある聖地に向かって五体投地をした後、両手を上げて万歳を三回唱え、最後に十字を切つて”エーメン”と信じてもない神に感謝を捧げながら必死に浮かび上がるニヤつきを相手にばれないよう抑え付けていたところなのだろう。

だがしかし。

今の僕には、”ちよつとうざったいかな?”と言う他に特に感じるものはない。

——性欲が、ゼロなのである。

第二次性徴がまだだからという理由が最もそれらしいが、それでも前世におけるこの年頃の僕はもうちよつとませていたような記憶があり、ここまで枯れていなかったよう

に思う。

とまあ長々と思考のブラックホール内をお散歩してしまつた訳だが、要するに、こんなほつぺをくつつ付けられても僕としては暑苦しいだけなのだ。

やつとこさ小方シヤオフアンを引き剥がす。

「ねえ。

小方シヤオフアンにとって僕は何？」

さつき頭に浮かんだちよつとした疑問を彼女に投げかける。

本当に、この子は僕をペットかお人形だと思つているんじゃないかならうか？

少し小首を傾げながら考え込む小方シヤオフアン。そして筆筒たんすの上にある筆記本メモ帳を手にとって鉛

筆でさらさらと何かを書き込む。

“小弟弟おとうと”

彼女はそう書かれたページを僕に見せた。

弟……ね……。

想像した物と違い、割と真面目な答えが返つてきた。

弟扱いというのも僕の世界年齢からすればぜひご勘弁願いたいのだが、……まあいつか。

肉体に引つ張られた為か、精神年齢が殆ど成長していないような気がしないでもない

し…………。

「そうだ、チャオズ。先程の練武場の爆発音、鶴仙人様のどどん波だろう?」

そう僕に聞く天さん。

「うん。午後から修行するって」

「……………そうか……………、もうなのか……………」

チャオズの成長速度は本当に速いな…………。うかうかしてるとすぐに抜かれそうだ」

そう言いながらも天さんは何だか嬉しそうな顔をしている。

「そんなことない。」

肉弾戦、天さんのほうが全然上」

「チャオズはまだ手足が伸びきっていないからな。」

もう何年かすれば自然と上達するようになる」

「うん」

生返事を返す。

正直思うのだが、この身体ってこれ以上成長するのか?

漫画のチャオズって、後半も殆ど容姿体格が変わってなかったような気がするのだが

…………。

「それじゃ、そろそろ行くこうか」

ぶん。

とりあえず今日の修行が少し前倒しに終わり、僕は久々に何をすることもなくボーと庭で空を見上げていた。

と、そこで人の気配を感じて目線を下げる。

「耳無し！」

僅かに驚愕を滲ませた声で呼び止める僕。

僕の前を横切って行くのは耳無しの爺さん。

何時もなら彼のことを風景の一部と見て声などかけないのだが、今日の彼は普段と違って、目立つ装いをしていた。

「どうしたの、それ？」

彼の衣服の六割方が真っ赤に染まっていたのである。

ぼたぼたと滴り落ちているのは間違いなく血液だろう。

「血化粧……怪我？」

多分違うだろうと思いつつも聞いてみることにする。

「これは餃子様チャオス。ご機嫌宜しゅうございます」

まずそう言つて腕を組んで一礼する血染め姿の耳無しの爺さん。そして彼はすぐ僕の質問に答えた。

「態々わざわざ心配いただき、有難うございます。

これは私めの怪我ではなく、返り血でございます」
やっぱりそうか。

歩く時に身体の軸はぶれていなかったし、怪我をしているようには見えなかった。

歳は六十を過ぎていたろうか。彼、耳無しはこの屋敷の管家グアンジャだ。

鶴仙人様の資産帳簿の管理から今夜のおかずまで幅広く監督している苦勞人である。

耳無しとはなんと彼の本名だ。言わずとも分かるように、名付け親は鶴仙人様である。思わず自分の名が餃子ぎょうざであることに安堵を覚える程に酷いセンスであった。

耳無しは七つだか八つだかの時にどこかから鶴仙人様が拾ってきたらしい。きっとその時にはもう両耳がなかったのだろう。以来五十年以上に渡って、ここで鶴仙人様のサポートをしている。

「いやいや、久々に暴れましてな。

やはり昔程には身体が動きません。まったく歳はとりたくないものです」
耳無しの爺さんは好々爺然とした笑みで言う。

そう。彼はこう見えてかなりの達人だったりする。拳銃を持ったチンピラ二十人くらいなら、無傷で全員逃がさず葬れる程の。鶴仙人様が拾ってきた点から見ても、その才能の程を想像出来るだろう。

とは言え、それはやはり人の範疇に納まる才能。僕や天さんのように人間を辞めては
いない。

一応この屋敷の序列においても、僕達の方が上だったりする。

「相手は？」

「石榴幫スリーユバンのチンピラどもです。」

最近やけに強いお仲間が入ったらしく、かなり調子に乗っております。一昨日、
三暗会サンアンホイの奴らに泣きつかれたんでございます。あそこには何人か知り合いました
ことですし、断わるのも角が立ちますゆえ——。仕方なく先頃、石榴幫スリーユバンの集会場を三つ
程つぶしてまいりました」

「そう。皆殺し？」

「ええ、もちろんでございませう、餃子チャオズ様。」

武を行使するのなら確実に殺す。鶴仙流の基礎理念でございませうから。

私はこれでも鶴仙流の端くれ。武の意味を鶴仙人様よりきっちり叩き込まれており
ますゆえ」

ははは。と照れ臭そうに笑う耳無しの爺さん。

「おお、そうでした。こうしてはいられませぬ。」

今夜バイバイ白様が久方ぶりにいらっしやるのでした。お部屋の準備もしませんと。

それでは、餃子様。チャオズ 私はこれで失礼いたします」
彼は一礼すると小走りで立ち去った。

「そうか。白白様が帰ってくるのか」

「天さん？」

いつの間にやら天さんがすぐ近くに來ていた。彼の五感はすこぶる良いので、きっと遠くから僕達の会話を聞いたのだろう。

「白白様って？」

多分、桃タオ 白白バイバイのことなのだろう。

原作知識では、彼は殺し屋で鶴仙人様の弟だったはずだ。

「桃タオ 白白バイバイ様は鶴仙人様の弟君でな、俺達の兄弟子にも当たるお方だ」

「へ〜」

「気さくな方だから、気楽に話しかけると良い」

「うん！」

気さくなのか……？

殺し屋のイメージしか知らないからな……。後、柱で空飛んだりとか。

~~~~~

「ハロ。みんなの人気者、桃タオ 白白バイバイだよん」

えー……。

これは無いんじゃない？

「軽いジョークだ」

はは……冗句でしたか……。

そんなこんなあつて、桃タオ 白白バイバイ様との初対面である。

鶴仙人様は二、三言話した後どこかへ行つてしまつた。今は僕と天さん、そして桃タオ 白白バイバイ様の三人がこの貴賓室らしき部屋を占領している。

桃色のチャイナ服に左胸の“殺”の一字。満州式辮髪べんぱつを結び、見事な鼻鬚はなひげを蓄えて

いる。全体的には何だか緩い雰囲気なのだが、その眼光は鋭く隙がない。あまり敵には回したくない。

これが僕が桃タオ 白白バイバイという人間に抱いた印象だつた。

「にしても、いつの間にやらこんなちんまい弟子が出来るとは」

桃タオ 白白バイバイ様は顎に手を当てながら腰を下げ、覗き込むように僕を見る。

「餃子チャオズと言います。桃タオ 白白様バイバイ」

「……餃子チャオズ……どうせまた兄者が適当に付けたんだろうな——。」

チャオズ、もつとフランクに白白バイバイおじさんとかでいいぞ。一応兄弟弟子きょうだいでしだしな」

「えつと……白白……さん」

「まあ、それでも良い」

白白バイバイさんは満足そうに頷く。

「よし！ 今日<sup>う。</sup>はせっかく可愛い弟弟子達に会えたんだ。わたしが夕食をおごつてやろ

天津飯もチャオズもついて来なさい」

「はい——」

「はい、有難うございます、桃タオ 白白様バイバイ」

「お前は相つ変わらず堅つ苦しいな」

~~~~~

白白バイバイさんに「ハイ、タクシー」と呼ばれた車に揺られて約五十分。

町並みは高層ビルが立ち並ぶ都心染みたものへと変化していた。

車は三階建ての皇居——もちろん中国の——のような建物の前に止まる。

大きな看板には赤の外枠を金色で塗り潰した字で、“金玉飯店”。

……うわあ……お下品……。

中に入ると従業員に個室へと案内される。白白バイバイさんは随分と手馴れているようで、頻繁にこういつた店を利用していることが窺えた。

そんなわけで、注文を全部白白バイバイさんに任せる。

そして十五分後、どう考えても僕達だけでは食べきれない量の料理が次々と運ばれてきた。これは……優に十人前くらいはあるだろう。

僕の当初の予想とは裏腹に、その晩はかなり楽しい一時を過ごすことが出来た。

料理に舌鼓を打ちながらの楽しい会話。

——いや、会話とは違うのだろう。何しろ殆ど白白バイバイさん一人が喋っていたのだから。

白白バイバイさんはその昔漫画家の道を目指していたのだそうだ。しかしやはり険しい道であるらしく、三十才の誕生日をきっかけにその道に進むことを断念。真つ当な会社に就職して、サラリーマンとして勤めるようになった。その後いつくかの会社を転職したが、延々と同じように繰り返される仕事に満足感を得られず、兄の鶴仙人様の助言により一念発起。脱サラして、殺し屋の仕事を始めることにしたという。その時御年おんどし二百七十一歳。

武術の修行自体はサラリーマン時代にチヨコチヨコと兄の元で積んできたらしい。その後あつと言う間に売れっ子殺し屋となり、今では“世界一の殺し屋”などと呼ばれることもあるのだそうだ。

その後も殺し屋として行つた場所の話、可笑しな動機で殺しを依頼してきた人の話、殺しを営む最中の逸話などなど、白白バイバイさんはそれらを面白おかしく話した。

白白バイバイさんの話は殺し云々を抜いてもとても面白く、僕と天さんは必死にそれらに聞き入つた。きつとこう言う人のことを話の面白い人と言うのだろう。

~~~~~

「わたしは休暇で一週間ここに滞在する。また明日遊ぼう」

屋敷に戻り、白白バイバイさんは「バイバイ」と言いながら耳無しの爺さんに案内されてどこかへ行つてしまった。多分来客用の部屋だろう。

天さんが気さくなお方と言つた意味が分かった。本当に気さくなお人である。

天さんと一緒に弟子専用棟に戻る道中、廊下で鶴仙人様とぼったり出会う。

「今晚は。鶴仙人様」

「こんばんは、鶴仙人様」

「ああ、お前ら、帰ってきたか」

両手を腰の後ろに回しながら話す鶴仙人様。

その背筋はピーンと伸びていてまったく老人とは思えない。

「はい」

「ご馳走になつて参りました」

「そうかそうか。まあ彼奴も弟弟子のお前らが可愛いのじやろう。

あの喋りでしたら止まらない機関銃のような口をなんとかしてくれたら、食事くらい  
わしも付き合つてやつたのだがな——」

話の流れから推察するに、どうやら白白バイバイさんは鶴仙人様を食事に誘い、それを鶴仙人  
様が断つたらしい。

鶴仙人様はそのまま手を顎に当て、思案顔でなにやら考えている。

「——チャオズ」

「はい」

「明日、白白バイバイに修行を見てもらいなさい。

彼奴あやつは“氣”の放出に關しては才能が皆無なのじやが、“氣”を使った身体強化、内  
氣功においては超人の域に達しておる。

そして何より彼奴あやつは柔軟な頭脳を持つておつてなあ。わしの気づかないことも教え  
てやれるかもしれん」

「はい。分かりました。頼んでみます」

「うむ。わしからも言つておこう。」

それじゃあ二人とも、早めに寝るように」

鶴仙人様はそう言つて立ち去つていった。

おやすみなさい  
「晩安、鶴仙人様」

「お休みなさい、鶴仙人様」

廊下の角を曲がつて姿が見えなくなるまで、頭を下げ続ける。

さて、明日は白白バイバイさんとの修行だ。

## 第五話 殺悪是悪、武の真髓

「よいか、武とは悪そのものじゃ。」

どんなに綺麗事を並べ立てようと、武力によつて相手の意思を——生命を消すことこそが武の真髓。わしがお前らに教えた技の数々は、全てそれを目的としておる」

「でも……、「武」で悪い人を倒したら、それつて、「善」じゃないですか？」

「そもそも、本質的には「善」も「悪」もこの世には存在せん。全ては人の主観による物じゃ。」

相手が悪と決めつけておるのはお前の主観。ならその悪を殺すのはお前の「独善」。

「独善」——、それは世間一般の常識において、「悪」と呼ばれるものじゃ」

「……みんなが、みんながその人を悪人つて判断した時は？」

「みんな？ それは世の中全ての人間の事か？」

チャオズよ、世の中全てに悪と評価を下されるような人は存在しない。お前が殺した「悪」は、必ず誰かしらにとっての「善」となる。ならその「善」を殺したお前は、やはり「悪」なのじゃよ」

「じゃあ……どうすれば……」



「別にわしはお前に『善』になれと言つとるわけではない。

始はじめに、武の本質とは『悪』じゃと言つたじゃろうが。悪なら悪らしく武を行使し、冷酷に、冷徹に、敵となつた者の未来を摘み取れい。

わしはな、善の武などと綺麗事をほざいて敵を殺し、その後で、『どうじゃ、わし良  
い事したじゃろ?』的な態度で通りを闊歩する奴らが一番許せん。相手を殺した時点  
で、同じ穴の貉むじなじゃろうに」

「……」

「じゃから、武を学ぶものは必ず知らなくてはならない——」

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

「確かお前、超能力が使えるんじゃないやなかったか？」

あつ！

一夜明けて次の日の練武場。

僕は昨日鶴仙人様から言われた通り、桃タオ 白白バイバイさんに修行を見てもらっていた。

「ならそれを鍛えてみればいいんじゃない？ そう滅多に無い能力だしな」

まったく。仰る通りで。

白白バイバイさんはさつきから辮髪べんぱつを留めているリボンの結び目が気に食わないようで、そ

れを弄くりながら僕に話しかけている。

「……うむ、これでよし。」

とりあえずそこら辺の物を超能力で動かしてみろ」

「はい」

言われるまですっかり自分にその技能があることを忘れていた。

始めて、そして最後に使ったのが約二年前なわけで、ええつと……どうするんだったけ？

そうだ……確か手の平をこう、突き出して。

——とりあえずあの岩をターゲットロックオン。

「んんん」

力を込めるにしてもどこに込めれば良いのか分からない。とりあえず両腕と両手に……。

もちあがれー！

ガゴンツ、パラパラパラ。

念じた通り、僕の身体五つ分程ある大きさの岩が独りでに浮き上がる。土に埋まっていた部分から泥やら砂やらがパラパラと落ちる。

おおー！ 出来たー。

事実上これが始めての超能力行使になるのだが、予想に反してあっさりとうまくいった。

こう、昔の自分に出来ないことが出来る度に思うのだが、本当に嬉しい。

「ほお、一発で出来たじゃないか。

なら……、今度はそれを使ってわたしを持ち上げてみる」

「は、」

言われた通りに白白バイバイさんを持ち上げるよう、両手の平を突き出しながら念じる。

もちあがれー！

「んんん」

さつきと同じよう、腕と両手に力を込める。



なるほどです！」

そうか。超能力で相手の肉体の調子を下げればいいのか。

心臓の動きが遅くなれば、その分血液を全身に行き渡らせる機能も衰える。そうして結果的に全ての動きが悪くなるはずだ。きつと気の練りも阻害されるだろう。

こんな使い方があったとは、まさに目から鱗である。

「とりあえずもう一度わたしに使ってみろ。」

なあと、内気は充満させておる。お前の柔な超能力で、わたしの心臓を止めることは出来ん」

「わかりました。」

——では、いきます！」

手の平を向け、白白バイバイさんの右胸——心臓に意識を込める。

むむむ……。

「……ほお」

自身の左胸に手を当てる白白バイバイさん。

「……確かに効いておるな。心なしか身体も少し重い」

「本当ですか？ やった——！」

素直に喜ぶ。





よく感じられる。

視線に力を入れる。

——ガゴンツという音。

目の前に鎮座する半径5m大の巨岩は、水が零れ落ちる速さで宙へと浮かび上がる。すかさず指を突き出す。

「どどん波!!」

僕の指より発せられた気弾は巨岩をくり貫き、中心に達したところで大爆発を起す。

轟音!

パラパラと降り落ちる石は全て親指大までに砕かれている。

「にじしし」

完っ壁!

最近最高に調子が良い。気の総量も超能力のパワーもどんどん増えている。

成長期なのだろうか?

修行の一つ一つに手応えを感じる。一日ごとに強くなっていくことを実感できる。

正に修行冥利に尽きると言ったところだ。

軽くストレッチしながら空を見上げてみた。

今日は何だか町の方が騒がしい。



なんだかんだで町まで出ることが滅多にないものだから、季節の行事にはあまり詳しくない。

今日はお祭りでもやっているのかもしれない。

さて、もうすぐ日が沈む時間だ。

今日はこれくらいにしておくかな。休むことも立派な修行だと鶴仙人様も言っていたし。

庭に咲く花を觀賞しながら、弟子棟まで続く渡り廊下を歩く。

梅の木エリアを抜けて桃の木エリアに差し掛かる。季節に合わせて芸術的に設置された庭は、見る者を飽きさせないような様々な工夫を凝らしている。今度ここにお弁当を持って来て、三人でピクニックと洒落込むのも悪くない。

そうだ。鶴仙人様も誘って四人で行こう。鶴仙人様はなんだかんだで僕らと食事をする機会が少ないしね。

内弟子としては師匠のお世話も義務の一つであるはずなのだが、ここは使用人が多くてその役目を僕らが果たす必要が無い。鶴仙人様が言うには、強くなることこそが何よりの師匠孝行なのだそうだが、やはりもう少し心の交流も欲しいところである。

「ん？」

頭両サイドのお団子をひよこひよこ揺らし、買い物籠かごを持った小方シヤオファンが裏門に向

かつていくのが見えた。

彼女は僕が見ていることに気づいたのか、嬉しそうな顔で手を振ってくる。

まあ、いつものことだ。ここで無視すると彼女は向きむになつていつまでも手を振り続けるだろう。そしてそれでも無視すると、どんどん近くまで寄ってきて、最終的には僕の目の前で延々と手を振り続けるのだ。前に実証したことである。

という訳で、僕も大きく右手を上げて手を振り返す。意地を張つても誰も得をしないのだ。

それを見て満足したのか、彼女は軽くステップを踏みながら、裏門から出て行った。僕はそのまま華々しい庭に別れを告げ、渡り廊下を曲がり、弟子専用棟へと向かう。

今日は天さんが鶴仙人様と共にどこかへ行ったので、僕一人だ。

部屋に戻った僕はベッドでごろごろしながら、最近買った冒険アクション小説を読み出す。

ここに来た当初、僕は鶴仙人様に文字の勉強を修行の合間にして貰うよう頼んでいた。因みに先生は耳無しの爺さんだったり、その他の使用人だったりで、鶴仙人様自身から教わったことは一度もない。

二年と少しの漢字漬けで大分文字の備蓄量は多くなってきた。小説を読んでも滅多に辞書をめくることがなくなったのは嬉しいかぎりである。

またパラリと、ページをめくる。

この静かな時間は修行ばかりの僕にとって、正に程よい心の休憩時間であった――。

~~~~~

読書に勤しむうちに夕日は静かに山の向こうへと沈みだし、窓からの明かりでは満足に文字が読めない程、辺りは暗くなってきた。僕は電灯を点ける為にベッドから起き上がる。

とそこで玄関から物音が耳に届いたので、そちらの方に足を伸す。

「チャオズか。ただいま」

どうやら天さんが帰ってきたようである。

と言うか、物音がする前から天さんの「気」が近づいてたことには気づいてたけどね。

「おかえり、天さん。お疲れ様ー」

鶴仙人様と何しにいったんだろ？

「ああ。

ところで、方^{ファン}がどこに行ったのか知らないか？」

そう言った天さんの右手には大根・葱などの野菜が入った網を持っていた。

「厨房にいない?」

「いや、来た時に寄ってみたが、居なかったぞ」

そう言えば彼女の“気”は感じない。

「なら、まだ買い物から帰ってないかも」

「買い物? こんな時間にか?」

……………それも今日に限って…………。

いつも早めに行けと、あれ程言っておいたのに」

そう言っつて不安げな表情をする天さん。

「迎えに行つてくる。チャオズはここで待つていてくれ。」

もし入れ違いで方が帰つてきたら、決して外へ出ないよう言い含めておくんだ」

「どうしたの?」

「石榴スリラン幫サンアンと三暗会ホイが大規模な抗争をやっている。先程車で抜けてきたのだが、町は蜂の

巣を突いたような大騒ぎだ。あちこちで武力衝突が起きている」

「!」

「鶴仙人様の家紋の入った服を着ているなら問題ないとは思いますが、もしものこともある」

「うん! 速く行つて!」

「ああ!」

天さんはそう返しながら舞空術を使って浮かび上がり、そして高速で飛んでいった。彼を見送るように僕も玄関から外に飛び出す。

僅かに焦る気持ちを胸に、そわそわしながら思い返す。

彼女は鶴仙人様の家紋が入った服を……確か着ていた。

なら事件に会う可能性は低いか。

だが、天さんは町が大騒ぎだと言っていた。直接じゃなくとも、巻き添えになる可能性がある。

ぐるぐると思考が回るか、九対一で大丈夫だろうという気持ちの方が勝った。

それからおよそ十分程経った頃。空から中庭へ、天さんは降り立った。

「チャオズ！ 帰ってきたか!？」

「ううん。まだ」

「……そうか」

そう聞くということは見つからなかったということなのだろう。

天さんの第三の目の知覚範囲はかなり広い。それで見つからないということは、いつも通る道には居なかったということだ。十分間も探していたわけだから、きつとその付近も広い範囲で見たのだろう。

こうなると、本格的に何らかの事件に巻き込まれた可能性が出てきた。

う。

僕と天さんは屋敷の広間で使用人達の報告を待つ。

——お昼になった。

無為に時間だけが過ぎていく。

探しにいきたいが、今更僕一人増えたくらいでは何も変わらない。

気で探せたらとも思うが、彼女の気は小さすぎて特徴もない。その為、他の一般人とは殆ど区別がつかないのだ。半径10mくらいまで近づけば分からないこともないのだが、そんな程度の探知力じゃ、この町を調べ尽くすのに一月は掛かる。そんなことをするよりも有事に備え、いつでも動けるようにここに待機することこそが最善である。

分かっている。そんなことは分かっているのだが、それでもじっとして居たくは無いのが今の僕の心情なのだ。

耳無しは使用人達からの情報の整理に勤しんでいる。シャオフアン 小方は彼が拾ってきたのだ。本物の孫娘のように思っていると以前吐露していたことを思い出す。

『来たばかりの小さな頃は方向音痴な子で、何度も何度もお屋敷の中で迷子になっていました。』

それで私はあの子の名前を小シャオフアン方と名付けたんでございます。

小さな方向音痴、ぴったりな名前でしょう』

そう嬉しそうに話していた耳無しは今、痛みを堪えた表情をしている。

そのまま大した情報が入ることもなく、間もなく日は沈む。

未だ彼女の死体が見つかっていないことだけが救いといえれば救いか。

そして時刻は間もなく深夜となった頃。

待ちに待った有益な情報がやつとこさ入ってきた。

「部下の報告によりますれば、小方は石榴幫シヤオフアン スーリユバンの下つ端共に何処かへと連れ去られたそうです。

重体となっていたとある野菜売りが先ほど意識を取り戻しましたようで、聞き取りを行なったところ、この話が出てまいりました」

「それで、場所は分かるのか？」

耳無しに詰め寄る天さん。

「石榴幫スーリユバンの拠点と言える場所は後二箇所しか残されておりません。

一つは町南方にある大麻の精製工場。もう一つは彼らの本拠地となります」

「そうか……」

「分担」

「チャオズ……。そうだな。

俺は工場の方を見てこよう。耳無し、手練てだれを二人借りるぞ」

「はい。どうぞ連れて行ってください」

天さんは外に飛び出す。

「では、私めはチャオズ様と共に参りましょう」

「うん」

外から「ドン」と轟音が聴こえた。多分天さんが飛んでいった音なのだろう。

後が続くように僕達も外に向かう。

「鶴仙人様」

玄関口で鶴仙人様が立っていた。

黙って頭を下げる耳無し。

「……チャオズよ、わしが今まで口を酸っぱくして言ったことを思い出せ」

何時もと変わらぬ飄々とした声で鶴仙人様は続ける。

「もし〃武〃を行使するのなら……分かっておるな」

「はい。」

行つて参ります」

抱拳礼をする。

耳無しの腕を掴み、僕は真つ暗な空に舞い上がった。

~~~~~

僕の腕にぶら下がる耳無しに案内されて辿り着いたのは、一軒の中華屋敷だった。面積は鶴仙人屋敷の四分の一といったところで、中々に広い。

その屋敷の上空から、適当な植木の陰に僕らは降り立つ。

「チャオズ様」

「うん、今探す」

目を閉じ、意識を集中させる。シャオファン 小方の気を思い出す。

——だめだ。ここからじゃ遠すぎる。

「もう少し近づく」

「はい、かしこまりました」

心配を消し、屋敷の屋根に飛び乗る。

出来れば小方シャオファンの安全を確保するまで発見されたくは無。しばらくは隠密行動だ。

屋根の上から屋根の上へと飛び移り、屋敷の中心部分まで移動。そしてもう一度目を

閉じ、意識を集中。

「……」

——半径10m以内にはいない。

集中、ひたすらに集中。

感知範囲をうどん生地のようにゆっくりと延ばす。

15 m。20 m。25 m。

「いた」

どうやらこちらの方が正解だったらしい。天さんの方は無駄足となったか。

彼女の気が感じられた場所を指差す。

「あそこ。かなり弱い」

「参りましょう」

無音かつ素早く。

屋根伝いに目的の場所まで移動。

「この下」

両手に手刀を作り、屋根に突き刺す。

そしてすばやく円形に回転。

シュツ、ガコン……。

円形に切り取った屋根だったものを取り外し、横に置く。

そして僕と耳無しは無言で中へ降り立つ。

入ったのは天井裏と呼ばれる場所だ。

小方シャオファンの気はこの下から感じる。

耳を澄ます。ここからなら部屋の中の声もある程度聴こえる。

「おい、陽全ヤンチエン ツォチーに周琪。」

交代の時間だ。次お前らだろう?」

「もうちよつと待つてくれよ。今、後何発で死ぬか賭けしてんだ。

一口百ゼニーだけど、お前も少しどうよ?」

「もう一発イッたら行くからよお。」

戻ってきたら死んでそうだし、俺死姦の趣味はねえぜ」

「ごちやごちや言つてないでとつとと巡回行つて来い!」

もう一昼夜もやってんだろうが! ……まったく、お前らも良く飽きねえな」

一瞬脳がブラックアウトする。

視界が真っ暗になる。

「へへ。残りの回数は俺が数えてやるよ。」

ほら、さっさと替われ」

「だからもうちよい待てて言つてんだろ! もうイクからよお」

続けて麻酔を打たれたみたいに脳がしびれ始める。

全身の感覚を喪失する。

「チャオズ様。お先に行つて参ります。

てえあ!」

耳無しが何かを言っている。

足元が崩れる。天井板が崩れる。

「ハイ! ハイッ!」

「アギヤー!」

「ガッ」

「え、お?」

「な、何だこいつは!」

男二人が首の動脈を切られて、ホースを強く握つたように血を噴出させている。

その傍らには手刀を構えた耳無し。

「そうだ——。」

彼女、シャオフアン小方はどこに?

あ……ああ……。

彼女は……いた。

いつもお団子にまとめていた髪は解けていた。

僕が贈つた髪飾りが壊れて、地面に転がつて——

「この糞爺が、誰に喧嘩うつ」

「テメ、どこのも、ガツ、ギヤアアアア！」

服を身に着けていなかった。

その下半身には白く濁った液体が――

「気を付けろ！ そのジジイかなりやるぞ！」

「銃だ！ 誰か銃取って来い！」

両腕が無かった。

両方とも二の腕から切られている。そこに適当に巻いた汚い布が――

「くそっ！ くそっ！」

「その餓鬼だ！ 一緒に来た餓鬼を人質に取れ！」

足が血に塗れていた。

両足首に腱を切った痕跡が――

「おい！ ジジイ！ この餓鬼を殺されたくなか、ごつ、うげええええええ」

「こ、この糞餓鬼！ てめぎやああああああ！ 足が！ 俺の足が！」

目は見開いていた。

何も光を映さない目を――

「畜生！ 逃げろ！ もっと人を呼べ！」

「<sup>リュウ</sup>?、<sup>リュウ</sup>?尚<sup>ウサ</sup>が」

「ほつとけ! もう助からねえ!」

ドダバダと足音が遠ざかる。

そして近づいてくる、静かな足音。

「チャオズ様、私は方<sup>ファン</sup>を医者<sup>フシ</sup>に連れて参ります」

「腕<sup>ウデ</sup>が」

部屋の隅に、彼女の腕が一本転がっていた。

「あれは、……もう使えないでしょう」

腕は食われたように何箇所も肉がゴツソリなくなっていた。

男達の中にカニバリズム性愛者がいたのかもしれない。

「僕<sup>ボク</sup>が、飛<sup>トビ</sup>んで……」

「いいえ、私の全力疾走はチャオズ様の飛行速度とそう変わりません。

こやつ等に邪魔されないようお願い致します。

——そして何よりも」

僕の熱せられた心が、意識が、逆に冷え切る。

三百六十度回って元の場所に戻った感じだ。

「うん。」

一人も逃がさない。全員、殺す！」

「お願い致します」

——元の場所に戻った？

「ふふふ……」

そんな訳がない。嘘だと思ふなら自身の首を三百六十度回してみるといい。

元の位置には戻っているだろうが確実に何かが違うのは違っているはずである。

……回りくどい表現はやめて現代風に言い直そう。

そう、僕は、キレていた。

~~~~~

シャオフアン
小方ヲを耳無しニに任せ、僕はもう振り向かない。

先程の彼らが逃げていった廊下を歩み進む。

随分と長い廊下だ。

これなら待ち伏せし放題だろう。

「いたぞ！ そいつだ！」

「なんだ？ ただの餓鬼じゃ——」

「いいから撃て撃て!!」

拳銃を構えながら出てきた敵は直ぐ様射撃を始める。

気を高め、流す。

身体だけでなく、体毛・衣服にまで気を張り巡らせる。

鶴仙流招法が一つ。

『鋼鶴衣』

全身に中る銃弾は、僕に痒みを与える効果すらない。

相手は四人。

飛んできた銃弾を三発、指ではじき返す。

額に銃弾を受け、断末魔すら上げられずに絶命する三人。

「え……えっ? ひ、ひいい。お、応援を」

逃げる一人はわざと見逃す。屋敷中の人間を呼んで来てほしい。

廊下を進む。

角を曲がると男が三人。無言で銃弾の嵐。

同じように指で銃弾をはじき返し、二人殺す。

「あえ? あ、あ——!」

残った一人は逃げずにそのまま銃を撃ち続けたので、近づいて小さく跳躍し、顎を蹴

り上げる。天井に衝突した頭が潰れたトマトのように凹み、絶命。廊下を進む。

横からドアを開け、斧を振りかぶる男。

その腹を拳で貫通。

「ぐほお、おお」

斧を落とし、僕に覆い被さるように崩れ落ちる。

落ちる斧を背後にいるもう一人の男に向かつて蹴り飛ばす。

「あ」

斧は背後にいた男の首を三分の二程切り裂き、ひゆるひゆると飛びながら部屋の壁に突き刺さる。

腕を腹から抜き、男を振り落とす。

クボオツという音。

男は両手で穴の開いた腹を押さええながら呻き声を漏らす。

背骨を叩き折っている。助からないので放置。

廊下を進む。

気の集まる方向に向かってもう一度角を曲がる。

接近戦用の得物を持った男六人。

「せいあー!」

突いて来た槍を掴んで一気に引き込み、持ち手の男の頭をもぎ取る。
噴水のように噴き出す血液。

間髪入れずに手に持った頭部を気で強化して投擲。

「ういっ」

「ぎ」

一人目の胸部を貫通し、二人目の顔をグシャグシャに潰す。

「っ、つるだ……」

こいつ、鶴仙人とこのもんだ!!」

残ったうちの一人がそう叫ぶ。ようやく気づいたのか？

その間に向かって来る曲刀持ち。

近づいて来たところに一歩踏み込み、軽く手刀を一振り。

「え?」

腰から両断。

はらわた
腸と共にぺちやりと床に落ちる。

遅すぎるんだよ。

「だめだ……応援を、応援を呼んでくるんだ!」

片方がそう叫ぶと、二人同時に逃げ出す。

応援は口実だろう。心の中では、きつとここから逃げ出せれば何でもいいと思ってるはずだ。

——そして、僕は追わない。

ここで一息つく。

このままだと効率が悪すぎる。

一旦目を閉じ、広範囲に気を探知。

バラバラの気が忙せわしく動いている。さすがに僕のごときは屋敷全体に伝わったはずだろう。

待つ。

——多くの気が一箇所に集まろうとしているようだ。

待つ。

——これは僕の進行方向。彼らの目標はこの先か。

待つ。

——どんどんこの先に人が集まって来ている。

ならば、もう少し待とう。

九割方の人間がこの先に集まったようだ。

広さからして、ここはホールのな部屋か？

まあ、何でもいい。

進もう。

もう廊下に敵は出てこない。

ほぼ全戦力をもつて、決着をつけるつもりなのだろう。

しばらく進むと、目の前には大きな取っ手の付いた、大きなドア。

やはり、ここはホールのな用途に使われる施設であるようだ。

取っ手を掴み、扉を押し開ける。と同時に銃弾の嵐。

プシュー……。

そして、ドオオオン!! ドオオオン!! と二連続。

鳴り響く轟音。

どうやら銃弾と共に、ロケット火箭弾も飛んで来ていたらしい。爆発で僕の周りの壁とドアが

吹き飛ぶ。

僕の気はほぼ減っていない。銃弾が例え眼球に中ろうと、ダメージは無いだろう。

そしてロケット火箭砲は――

――ドオオオオオオオオオン!!

――ドオオオオオオオオオン!!

それは前列にいた数人の頬を掠め、人の密集している中央付近にいる男の右胸に命中した。

光は——どどん波は男を貫通せず、中に潜った時点で爆散！

「うわあああああ!!」

「ぐげああああ!!」

「うぶっ!」

「痛てーよー! い、痛てーよー!」

吹き飛んだ男は即絶命。だがその爆風により撒き散らかれた臓物はらわたや人骨が周囲の人間に突き刺さり、二次災害を引き起こす。

鶴仙流絶招、どどん波が崩し。

『どどん波・砕』

直ぐ様続けて第二射。

同じく人の密集地の中央にいる男に命中させる。

「ぎゃああああ!」

「目に! 何かが目に刺さっ!」

「うああ!」

「グボエエエエ……」

悲鳴も上がられずに爆散する男とは逆に、人骨が身体のあちこちに突き刺さり、痛み
に悲鳴を上げる周囲の人達。

第三射。第四射。第五射。

悲鳴と怒号の五重奏がホール内に響き渡る。

「む、無理だ！」

「お、おれは、もう辞める！ 辞めてやる！」

「逃げろ！ 逃げ——」

我先にと、僕が入ってきたのと違う二箇所の出入り口へと殺到する男達。

僕の指先が光り、ポーンとまた一つ、赤い花火が咲く。

「開かねえ！」

「ち、畜生！ 誰だ、鍵閉めた奴！」

「蹴破れ！ はやく——！」

指が光り、ポーン。

「なんで、何で開かねえんだ！」

「はやく！ はやくしてくれえ！」

「死にたくねえ、死にたくねえよ」

指が光り、ポーン。

「いやだー！ やだー！ ちくしょう！」

「開け！ 開け！」

「どうなってんだよ、これ！」

『超能力・念動固定』

対象は扉二箇所。

開くわけがない。

そして、僕の指はまた光を放つ。

随分と長く掛かった感覚もあるが、実際には三分も経ってはいない。

もうこの部屋で生きている者は僕一人だけだ。

「うう……うう……」

「ああ……」

いや、訂正。辛うじて生きている者もいるが、間も無く死ぬだろう。気を探る。

五人が固まっている箇所を見つけた。

向こうはまさかこの人数が負けとは思っていないだろうから、逃げることはないだろう。

とは言え、時間を与えるつもりもない。

飛び上がる。高くジャンプだ。

天井を突き抜け、空へ。

そして舞空術で位置を調整する。

「どどん波！」

例の五人固まっている箇所。

そこに存在する気の一つに向けて、どどん波を放つ。

どどん波により開いた屋根の穴を通りぬけ、僕は再び屋敷へと侵入する。

予定通り、五人のうちの一人は床の染みと化していた。

「お前が、侵入者か」

五十歳前後だろうか。僕に話しかけたのは端正な顔のおじさん。

金色の、龍の刺繍がなされたチャイナ服を身に纏っている。

天井と人間を破壊し、中へ降り立った僕に対し全く恐怖を感じた様子を見せない。

そして、上に立つもの特有のオーラが見えたような気がした。

多分こいつが首魁なのだろう。

「^{ホウジャン}胡江、任せる」

「はっ！」

そして僕の前に出たのは三十代の辮髪の男性。

灰色のチャイナ服に黒の功夫シューズ。

「はあああああ」

馬歩を踏み、気を練り上げる胡^{ホウジャン}江と呼ばれた男。

……なるほど、強い。

耳無しだと勝てないだろう。

「小僧、今までのように簡単にいくと思うな」

今までのように？

視線だけを動かし、部屋の中をさっと見る。

左隅に多数のモニター。そこには屋敷のあちらこちらが映っている。

なるほど、監視カメラか。

「さあ、かかって来い！」

でなければこちらから行くぞ！」

ならお言葉に甘えて。

舞空術で地面から約1cm程度浮く。

そして直立姿勢のまま、舞空術のみを推進力に前進。

「な、何!？」

予備動作もなく、あつと言う間に男の懐に入り込む。
腹に拳突き。

「くっ」

危ないところで腕での防御に成功する男。よく内気を練っているな。
そのまま一步下がる男に対し、僕は一步前進。

「せいやー！」

ちようど射程内に入った僕の顔を狙い、男はカウンターを打つ。

「なっ?」

しかし、僕はそこにはいない。

空振りする男を横目に、僕は後ろにバックステップ。

それを見て構え直す男。

「ぐはあ」

僕の拳が男の胸に突き刺さった。

たたらを踏み、二歩、三歩と男は下がる。

そして全内気を防御に回し、全身を石のように固める。ここで一旦仕切り直した。

「……どうなっている?」

答える義理は無い。

内気を存分に練り上げ、拳に集める。

僕は直立不動のまま、螺旋を描いて男の背中へと回る。回りながら高さを調節。

「な、はや」

「はっ!」

そして僕の拳は、男の心臓を貫いた。

「あ……ああ……」

僕は常に舞空術で宙に浮いていた。

僕の動きはそのまま僕の向かう方向とは結びつかない。

前に進むと見せかけて下がり、下がると見せかけて前進。

右へ飛びながら後ろへ下がり、直立しながら前へと進む。

武術とは基本、相手の姿勢や動きを見て、次に来る位置を予測するもの。

これにより、男は影かげまほうし幻を相手しているかのように感じたことだろう。

鶴仙流招法が一つ。

『鶴かくげんそう幻走』

息絶えた男から腕を抜き、首魁に向き直る。

「は……ははは、私が、この私が終わる? こんな餓鬼に——」

「どどん波・砕さい」

首魁は周囲の取り巻きを巻き込み、なんの感動もなんのドラマもなく、ただの肉片と化した。

最後に舞空術で空に舞い上がり、気を探知。

屋敷のあちこちに点在する気は、残り九人分。

「どどん波」

撃つ。

一人分の気が消えうせる。

「どどん波」

撃つ。

更に一人分の気が消える。

「どどん波」

撃つ

これで残り六人。

「どどん波」

撃つ——

屋敷から感じられる気が零ゼロになった時、僕の気の残量もぎりぎりとなっていた。

後どどん波もどき一発と言ったところだろう。

小方シヤオフィンの姿を思い出す。

こいつらを殺し尽くしても、何も良い事は無い。

何も解決しない。

彼女の受けた傷は癒えない。

くそつ。くそつ。くそつ。

いくら罵声を並べ立てても、僕の心が晴れることはなかった。

~~~~~

小方シヤオフィンはベッドで眠っている。

無表情に、只只時が過ぎ去るのに身を任せている。

足の腱は何か人工的に繋げられるそうだ。

とは言え、前と同じように戻る訳ではない。

走ったりすることは難しくなるとのこと。

腕はもうない。

サイボーグ手術で新たな義手を付けられるのだが、それはとても高額であるらしい。

よしんば僕や天さんがそのお金を稼いできても、付けられるのは肉の腕じゃない。機械の腕である。障害は死ぬまで残る。

そして何より意識が戻らない。

医者によると、出血多量で脳にダメージを受けた可能性が高いとのこと。

そしてもしかしたら、彼女自身が自分を守る為に、その意識を閉ざしたのかも知れない。

目覚めるのは明日かもしれないし、百年後かもしれない。

後悔する。

確かに遅い時間だった。町が騒がしいことにも気づいていた。

嬉しそうに手を振る彼女を思い出す。

拳を握り締めながら小方シャオフアンを見る。

なぜ、僕はなぜあの時、彼女を止めなかった。





本当に有難うございます。あいつらの暴虐には皆辟易へきえきしとりました。

坊ちやま達のおかげで、私らはこれからも安心して商売を続けられますだ」

そんな町の人々の賞賛を浴びながら、僕は夕飯の材料を買う為に市場を歩いていた。

意図して正義を行ったわけではないが、人々からの感謝は耳にも心にも心地よい。

しばらく市場を練り歩く。

そろそろ賞賛の言葉を受け取るのが面倒臭くなってきた。僕の両手は皆からの贈り物で一杯になっている。

「鶴仙人様のとこの坊ちやん、良ければこれをどうぞ」

新たに貰った白菜二株を超能力で頭上に浮かす。

これだけもらえればもう今日は買い物しなくてもいいだろう。

——帰ろっかな。

よし、と踵を返したところで、大きな泣き声が僕の耳に届いた。

「わーーーーん!! えあーーーーん! うあーーーーん!!」

兄妹だった。

兄は七、八歳くらいだろうか。憎悪に満ちた視線を僕に投げかけている。その手に繋がれた妹らしき幼子は四つに満たないのだろう。先程からこの世の終わりかと言う程に、わんわんわんわんと泣き続けている。

「お前！ 鶴んとこの人間だな！」

反射的に「うん」と返す。

「おれの名前は周平<sup>ツオベン</sup>。」

おれは、お前らに殺された周琪<sup>ツオチ</sup>の息子だ！」

一瞬、浮かれていた頭が冷える。

いつかの、鶴仙人様の言葉が脳裏を過ぎ<sup>ト</sup>った。

少女は泣く。

「おれ達の父ちゃんを殺したお前らを、おれは絶対に許さない！」

みんなはお前らが良い事をしたって言うけど、おれは絶対に許さない！」

——お前が殺した“悪”は、必ず誰かしらにとっての“善”となる。

少女は泣く。

「父ちゃんはいけないことをしてたかもしれないけど、お前らだって同じだ！」

父ちゃんを殺したお前らだって絶対に悪い奴なんだ！」

——ならその“善”を殺したお前は、やはり“悪”なのじゃ。

少女は泣く。

「みんなにちやほやされていい気になってんじゃねえ！」

いつか絶対、絶対復讐してやる！

お前らが悪い奴らだって、おれは知ってたんだ！ おれは知ってたんだ!!」

——じゃから、武を学ぶものは必ず知らなくてはならない。“武”とは——  
少女は泣く。

「殺してやる！ 待つてろ！」

いつか絶対に殺してやる！ 殺してやるからな！」

——“武”とは、“悪”そのものであることを。

少年は石を拾い、何度も何度もそれを僕に投げつける。

そのいくつかは僕に当たるが、ちつとも痛くない。僕の身体を傷付けることはできない。  
い。

そう、これが、僕の進む道。僕の行く未来。

だから僕は、堂々と、愉快そうに、“ニタリ”と笑う。

飛んできた石を一つ軽くはじき返す。

それは男の子の腹部に当たり、彼は腹を押さえてうずくまる。

「う……う」

「お前には無理」

「うう……。ちくしょう……。ちくしょう……。」

「この悪人め……。この悪人め！」

憎悪が込められた視線を、僕は真っ直ぐ見つめ返す。

「そんなの、当たり前」

~~~~~

~~~~~

そして三ヶ月の時間が過ぎ去り、季節は夏となった。

シャオフアン  
小方シャオフアンは依然として眠ったまま目覚めない。

僕は……ドラゴンボールを探す旅に出ることを、決意した。

## 第六話 とことこ走るよ、旅の道

「チャオズ、道中、身体には気をつけて」

「天さんもお達者で」

僕の背中には僕の体積の二倍程ある背囊リュックが背負われていた。

中には寝袋、サバイバルキット、食料などが入れられている。

今日は僕が武者修行の旅に出発する日である。

少なくとも鶴仙人様にはそう言つてある。でなければ、まだ未熟な僕を外に出すとは到底思えなかつたからだ。

天さんには僕の目的を教えてある。最初は伝説に縋るような真似は反対されたが、僕の根強い説得で——ねちねちした説得とも言う——とうとう折れてくれた。

この旅に天さんはついてこない。まだ鶴仙人様の元での修行を優先させたいらしく、それに何より小方シヤオフアンが目覚めた時に備えて、心を許せる人が傍にいた方が良好だろうとのこと。

その意見には僕も反対しない。むしろ僕一人の方が色々と動きやすいので、積極的に天さんの案に賛成した。

「チャオズ、お前が何をする為に旅に出たいのかをわしは知らんが、どうせならより多くのことを学んで来い」

鶴仙人様は何時もの姿勢——両手を腰の後ろに回した姿勢で言う。

はは……、武者修行目的じゃないってバレてら……。

この旅において、原動機つきの乗り物の使用を禁止された。修行にならないからだそうだ。

そして意外なことに、舞空術での移動は大丈夫とのこと。一応長距離は控えめにしとけとは言われたが。まあ、どうせ使うにしても気の総量がまだ少ない僕ではそんなに長くもたない。

だからこの背中の背包リュックが重要になるわけだ。

「そしてさっさと目的を終わらせて帰って来い。お前に教えたいことはまだ山程ある」

「はい。鶴仙人様」

一礼する。

「チャオズ様。私共の助けが必要となった時、どうぞ遠慮なくご連絡ください」

と、これは今ままでずっと後ろに控えていた耳無し。

出発前に彼からでかい無線機みたいな携帯電話を貰っていた。

「大丈夫。番号もちゃんと入れてある」





正確には西の都にあるカプセルコーポレーションの一人娘、ブルマの元にだ。

ここで問題になってくるのは、一体今は原作におけるどの時期であるかということ。もうドラゴンレーダーは完成しているのだろうか？

「はむ。むぐむぐ……」

椅子に腰掛けながら干し肉を口に入れてもぐもぐさせる。

耳無しが持たせてくれたこれ、美味いな！

中までしつかりと塩味が染み込んで、外に振つてある七味唐辛子が程好い刺激を口内に与えてくれる。そして噛めば噛む程染み出る旨み。干し肉つてもつと味気ないものだと思っていたが……。

「あ、あの……お、お坊ちゃん？」

僕の座っている椅子が——おバカなことに、僕に襲い掛かってきた追い剥ぎが、おずとおずと僕に話しかけて来た。

「椅子が喋るな」

「ひいつ」

主人に拳を振り上げられた犬のように、3 m近くある身長を小さく縮こませる追い剥ぎ。

僕は干し肉の最後の一切れを口に入れ、またもぐもぐする。

「……………あ、あのく……………わたしはいつまでこうしていればいいでしょう？」

「うん。もう食べ終わった。今殺す」

「ちよつと待つてください！ お願いしますお願いします！ 殺さないでください！

知らなかったんです！ 本当です！」

「鶴」の紋章、僕の服に大きくある。嘘つきは嫌い。やっぱり殺す」

「いえ嘘です、知ってました。ごめんなさいごめんなさい。いくら「鶴」でも子供なら大丈夫かな〜って思っていました。すみません何でもします！ お願いだから殺さないでえ！」

必死に目を「く」の字に瞑り、懇願してくる。

「……………お前、さつきまでの威勢、どうした？」

「ごめんなさい、ちよつと調子に乗ってただけなんです。もう二度としません。これからは犬とお呼びください。ですので、何とぞ、何とぞ命だけは！」

追い剥ぎは両手を合わせ、すりすりしながら拝み始める。多分僕を……………。

はあ……………。ここまで卑屈になられるとどうも殺しにくい。

……………いつか。

「お前の溜めたお金、全部僕に渡す。僕が満足する額があったら、お前殺さない」

「は、はい——！ ありがとうございますう！」

冷や汗をかきながらにこにここと揉み手をする追い剥ぎに連れられ、彼の寢座ねぐらへ。彼は喜んで全財産を僕に献上した。

僕が言つた条件は“僕が満足する金があれば殺さない”だ。

こう言われてへそくりを隠す度胸はコイツにはないだろう。

彼が大して財宝を溜め込んでないことと、溜め込んだ財宝の殆どを宝石に替えてあつたことはある意味幸運だった。問題なく僕の背囊リュックに入ることが出来たのだ。でなければ次の町まで彼を荷物持ちちとして連れて行かなければならないところだった。

「仲間はいないの？」

「いえ。あつしはピンでやってるもんでして。

「これでも中々名の通つた——」

「余計なこと喋るな」

「ひいつ！ す、すみません！」

頭を下げる追い剥ぎ。

「喜べ。今回は殺さない」

「は、はい……」

「喜べ」

「はい！ や、やったー、嬉しいなあー」

「それで良い」

「ば、ばんぎーい、ばんぎーい」

涙目で万歳する追い剥ぎに背を向ける。

そして地図を広げ、目を落とす。続けて指南針を水平に。

西の都は大体この方向だな。

まあ、ちよつとくらいずれても仕方ない。道中こまめに道を聞いていこう。

後、途中町に寄って宝石の換金もしたいな……。いくらになるか分からないけど、多

いようなら通帳でも作ろ。

「ばんぎーい、ばんぎーい」

よし。

走りますか。

~~~~~

基本徒歩の旅を始めてなんだかんだで二ヶ月。

山を越え川を渡り野原を駆け抜けてきた。途中何回か盗賊団に出会い、ぬつ殺して資金調達。

そして、まだ西の都には着かない。……広すぎでしょ、世界……。

「西の都？ そりゃあつちの方だな」

今僕は若い狐の獣人に道を聞いていた。

彼は黄色いオーバーオールを身に着けて、足には緑の長靴。そして、片手に鋏くわを肩に担いでいる。

ウチの近所の農民が着ていたボロ雑巾のような作業着と比べると随分と文化的な装いである。

狐の彼のように、この世界には様々な獣人が存在する。猫だったり、犬だったり、蜥蜴とかげだったり、恐竜だったり、虫だったり、ロボだったり、謎の生物だったり……。

いやまあ、僕はいつらのことを獣人と心の中で呼んではいるが、実際そんな呼称は無い。

彼らは一律して人間と呼ばれるのだ。つまり地球人類。

……懐広すぎだろ……地球人類……。

「そこをずーつと行つたところにあんな、多分」

「ずーつとつて……。ここ、海」

それに多分って……。

「おう、そうだ。この海のずーっと向こう側だ」

「西の都？」

「そう、西の都」

「……あ、ありがとう。教えてくれて」

「いいんや、別にいいぞ。」

「おつかさんが近くにいなえようだが、坊主、ひよつとして迷子だったりするか？」

「あ、いえ、大丈夫です。」

「どうもありがとうございました」

「そう言つて軽く一礼する。」

最近どうも徐々に地域の文化レベルが高くなってきたように、こうして僕の心配をする通行人が度々現れる。半月前までの地域では誰もそんなこと気にすらしなかつたんだが……正に人間、衣食足りてなんとやらである。

狐さんが去り、僕はしばらく海を眺めていた。

「……」

「うーん、どうしよう。」

実は僕は大きく泳げなかつたりする。水に浸かるのが嫌で、中学のプールの授業も何

かと理由をつけて休んでいたりしたのだ。

まあ、さすがに小学校での経験分が残っているので、まったく水に浮かばないわけはないのだが……。

いや、やっぱり長距離水泳は今の身体能力があっても無理だな。気持ち的にも。

——ここらで一旦落ち着こう。

リュック
背囊をひっくり返して、底の方にある地図を取り出す。

人に聞いた方が手っ取り早いということもあつて、最近ではめつきり出番の減った地図である。

ええつと……。ここがカバ村で、あっちつてことは——。

指南針を取り出す。

……北東、か……。

途中、行き過ぎちやつたのかな？ もはや西の都が西にない。

待てよ……。つてことは、この海の向こうか。

地図に表記された西の都とカバ村を経たてる海は、大西洋程の広さがある感じだ。

……これを泳ぎきるのは、無理じゃない？

——よし、飛んできこう。

五秒で方針が決まった。

となれば、途中休む為のボートが必要である。今の僕でも飛んで横断出来る自信はあるのだが、さすがに二、三日はかかるだろう。

買物しに、近くの繁華街まで行こう。

僕は浮かび上がり、繁華街のある内陸に向けて高さ10mくらいの低空飛行を開始した。

「わっ」

「おっとっと」

通り過ぎる町の人たちが驚きの声を上げる。ちょっと面白い。

途中大荷物を背負ったお婆ちゃんを見つけたので、超能力で荷物ごと持ち上げる。

「お？ お、お？」

「お婆ちゃん、どこに行きたい？ 僕が運んであげる」

「あら？ あらあら、坊や、ありがとう。」

それじゃあ、この先の白い屋根の家までお願いするわ〜」

「うん」

無駄な人助けだと言うなかれ。二回に一度くらいは何かお礼が貰えるのだ。

そうでなくても何らかの情報が得られたり、超能力の特訓にもなったりする。まあ、良い事づくめなのだ。まさに情けは人の為ならずである。

「わたし、空を飛んだのはこの年になって初めてだわ。」

「そうそう、空を飛ぶで思い出したけどねえ。この間——」

「お婆ちゃんの話しに適当に相槌を打ちながらゆっくり目に運んであげる。」

「目の方は焦点を広げて、長閑な町を高所から鑑賞する。」

「なかなか良い気分だ。」

「——あの……すみません……。」

「お婆ちゃんの話し声に混じって、右前方から何処かで聞いたことのあるような声が聞こえてきた。」

「そちらに目を向けると、なんと、長閑な村の真ん中で、大きな亀を見つけた。」

「海はどこでしょう？ ご存知ありませんでしょうか？」

「亀は四、五人で遊んでいる子供達に道を聞いていたようだ。」

「へへへ、あつちだよ、あつち」

「そうそう、あの山のずっと向こうだよ」

「それからずーっとずーっと歩くんだよ。わかった？」

「はい。教えて頂き、どうも有難うございます」

「僕が来た方向とは逆の方向を指差す子供達に、頭を下げた礼を述べる亀。」

「おう！ じゃあな——」

「ははははは」

駆けていく子供達。

そして亀はのそり、のそりと、まさしく亀の這う速度で山を目指し始める。

「……………」

「どうしたの？ 坊や」

「ううん、なんでもない」

……………」

……まさかね。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

「危ないだろ！ このクソガキ！」

いやいや、危ないのはお前の方だと言いたい。

ものすごいスピードで角を曲がった車——ホバリング走行している——は青信号を渡る僕の肩をかすり、ビルの壁に突っ込みそうになったところで慌てて急ブレーキをか

けたのか、あわや大惨事の寸前で止まることが出来た。

窓から顔を出して怒鳴る、青いキャップを着けた中年の運転手。

まあ、僕を避ける気があつたことだけは評価する。

『ちよつと、その車！』

案の定、お巡りさんが乗ったパトカーが追いかけてきた。

「やべっ。

……………つて、あれ？」

いくらエンジンをかけても進まないのは当たり前だ。車のお尻を僕が掴んでいる。

ついでに超能力でも固定。うん、ちよつと楽になった。

パトカーはタイヤもないのにキキーツと音を立てて止まり、そのフロントドアから婦警さんが降りてくる。

「ふう……。またあなた？」

「へ……。へへ……」

「あなたねえ、今回こそ免許よ、免許」

「いやすまねえっ。今度から気をつけるから、なにとぞ、なにとぞご慈悲を」

「はあ……。あるわけないでしょ。そんなの。」

——あら？　もしかして、あなたが止めてくれてたの？」

ようやく僕のことには気づいた金髪の婦警さん。

彼女はカールする長髪をかきあげつつ、腰を下げて僕と目線を合わせる。

「ありがとう。」

坊や、随分と力持ちね」

「うん」

さて、ここら辺で道を聞いておこう。丁度お巡りさんも目の前にいることだし。

「お巡りさん、カプセルコーポレーションのブリーフ博士の家、知らない？」

飛行時間約1・5日。今僕は西の都にいる。予定していたよりも随分と早く着いたのは、僕の気の総量が増大していることが原因だと信じたい。

そしてなんと、西の都に着いてすでに三日目。

まあ……なんだ。

こんな発展した未来都市は初めてだし、荷物をホテルクロークに預けて、つついっ観光しちやっただけだ。

苦節ウン年。楽しいと思えるような環境にいなかったわけだしね。

言うなればカンボジアや北朝鮮辺りですつと過ごしてきたような、そんな感じ。娯楽が、エンターテイメントが発達してない場所だったのだ。大都市に興奮したのもそう可

笑しいことじゃないと自己弁護してみる。

「着いたわ。んごよ」

親切な婦警さんはわざわざ僕をパトカーに乗せて、目的地まで連れてつてくれた。

パトカーから降りる僕を周囲の通行人が「何かあったのか？」というような目で見てくる。

さー無視無視。

「ありがとう。おねえさん」

実はそろそろおばさんと呼ばれる年代に差し掛かると言うか間違ひなく差し掛かっている婦警さんに対し、お礼と同時にお世辞も言ってみたりする。

「うん。これからは青信号でも気をつけてね」

「はい」

僕の頭を思う存分撫で撫でした後、彼女はパトカーに乗って去っていった。

目の前にあるのは大きな半球体の建物。

カプセルコーポレーションだけあってカプセルをイメージしてデザインしているのだろうか？

この西の都において半球体のカプセル型ハウスはちらほらと見かけるのだが、もしかしたらそれら全てがカプセルコーポレーションの製品なのかもしれない。

さて、他にもちらほらと半球体のカプセルハウスを見かけると言ったが、目の前の建築物はある意味それらとは決定的に違っていた。

「何じゃこりゃ!」的に大きいのである。

ここからは三つの半球体カプセルハウスが見えるのだが、その一つ一つが東京ドーム……は言い過ぎとして、西武球場くらいあるのだ。個人でここに住むのは却^{かえ}って不便ではなかるうか?

つて、今まで鶴仙人屋敷に住んでいた僕が言う台詞じゃないな。

行きますか。

ブリーフさん家のインターホンを押す。

少し感動。

おおー。インターホンを、押す。なんと文化的な行為でしょ。

『ドチラサマデシヨウカ?』

機械音が流れ出た。

「僕、チャオズと言います。ブルマさんにお会いしたいのですが」

そう、目的はブリーフさんではなくあくまでもブルマさんなのである。

問題は仮にも社長令嬢。ここで会わせてくれるか……。

『ブルマお嬢様ハ学校ニ行ツテオイデス』

「いつ帰って来るか分かりますか？」

『帰宅予定時刻ハ——はいはい、どなたかな？』

機械音声から男の声が変わる。

「えつと……ブリーフ博士ですか？」

『うんうん、わたしだよ』

「あの、僕。ブルマさんに、会いたいですけど——」

『ブルマのお友達かな？』

ブルマは今学校に行つててねー。案内を向かわせるから中で待つてるといいよ』

ドアが独りでに開いた。

……。

……。

……。

ええつと……。

「あの……、入って——」

下半身は車輪、上半身は人型のロボットがドアから出てくる。

僕と同じくらいのサイズしかないミニガンタンクは、メイド服を身に着ていた。因みに顔はリアルな人のそれではない。

『ドウゾ、コチラへ』

随分あつさりと……。

メイドロボ(?)に言われるまま付いて行く。

玄関を抜けるとあたりは植物園のような景観だった。名も知らぬ木、草花は其処彼処そこかしこに生えている。とは言え、ちゃんとデザイン性を考慮して配置してあるようで、乱雑に木々が生い茂るジャングルのような不快感はない。

よく見ると草や木の影に犬、猫、謎の毛玉などの動物がちらほらと。寝てたり、毛繕いしたり、追いかけてっこしたりで皆思い思いに過ごしていた。

そして人に飼われる動物だけあって、今し方入ってきた外来人である僕を怖がる様子を全く見せない。

「あはは」

年甲斐もなくウキウキしてしまう。

動物は好きだ。

癒される。

動物の走り回る植物園を案内されてしばらく歩く。人工的な物なのだろうが、高い天井から辺りを照らす光は気持ちがいい。

やがて、東屋的なものが視界に入った。ここが目的地かな？

「コチラデオ待チクダサイ」

案の定だったようだ。中にあるテーブルセットに案内される。そしてメイドロボ（？）は立ち去らずに近くに控えた。

「何かゴザイマシタラ、オ言イツケクダサイ」

うなずいて、とりあえず椅子に座る。

帰って来るまでここで待ってしよう。

~~~~~

「あらあら、あなたがブルマのお友達ね」

しばらくすると、三十代後半と思しき女性がお菓子の乗った盆を手にとってきた。

名前は何だつけ？ 僕の記憶が正しければ、この人はブルマのお母さんだ。

「いえ、あの、ちが——」

「あらやだ、可愛いわ。ここまで一人で来たの？ あ、どうぞ、お菓子食べて」

菓子の載った盆をテーブルに置きながら話し続けるブルマのお母さん。

「いえ、あの——」

「ブルマも随分と小さなお友達がいたのね。」

ねえ、ちよつとおばさんの話聞いてよ。最近ブルマが構つてくれなくて——」

あ、この人、人の話を聞かないタイプの人だ。旅先でもたまにいたし……。対処法は逃げるか、気が済むまで話を聞いてあげること。

——まあ、いつか。暇潰しにはなるし、話を聞いていよう。お菓子でも食べながら、ね。

~~~~~

「ブルマオ嬢様が御帰りニナラレマシタ」

「——てね、あたしはこう言ったのよ。旦那なんか無視して好きにすればいいわって、あら、あの子つたらやつと帰つてきたのね」

「母さん？ あたしの友達が来てるって聞いたけど。」

「……………つてキミ、誰？」

歩いてきたのは短パンにへそ出しシャツの女の子。肩には軽そうな小さなカバンをぶら提げている。青緑の髪は肩に少し触れるくらいで、髪留めなどつけずに自然に流している。

うん、間違いない。ブルマさんだ。

「僕、チャオズです。ブルマさんとお話したいことがあって——」

「そう、それで母さんが勝手にあたしの友達だつて勘違いしたのね」

彼女は一瞬で全てを察したようだ。さすが長年家族をやつていない。

まあ、始めに勘違いしたのはお父さんの方だけどね。

「ねえ、ブルマ。チャオズちゃんをウチの子にしてもいい？ 可愛いの」

「もう、馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ！ それといつも言ってるけど、母さんは勝手に人の会話に入つてこないでちょうだい！」

——あたしに何か用があるんです？ ならあたしの部屋で話しましょ

歩き去りながら手でちよいちよいやるブルマさん。そして娘に怒られたお婆さんは

「うう」とか言っている。

「それじゃあ、あの、失礼します」

一礼する。

「うん。チャオズちゃん、またお婆さんの話に付き合つてね」

「はい」

もう一度礼をして、ドアの前で待つてくれているブルマさんを追いかける。

「大変だったでしょ？ 母さんの話、長い上につまらないのよね」

「いえ」

相槌を打つだけの簡単なお仕事でした。

「むかしからあーなのよね。もうちよつと緊張感とか持つてくれないかしら」

あの人にそれを求めるのは無茶振りだろう。

「さあ着いたわ。適当に椅子に座つてて。」

飲み物何がいい？ コーヒーとジュースあるけど？」

「じゃあ、ジュースで」

「OK」

そう言つて部屋に備え付けてある小型の冷蔵庫からジュースを取り出し、グラスに注いでストローを挿す。続けてコーヒーマシーナースーパーらしき機械のボタンを押し、カップにコーヒーマシーナースーパーを注ぎ出す。これは自分用なのだろう。

ブルマさんの部屋はあまり女の子らしいものではなかった。二十畳ほどある部屋の右半分はコンピュータやら工具やら謎の機械——加工用かな？——やらに、乱雑に埋め尽くされていた。左半分にはたんすやベッドなどの生活用品が置かれていて、かなり綺麗に整頓されている。

ベッドに置かれていた熊のぬいぐるみが唯一女の子らしい持ち物だろう。

……まあ、僕の女の子の部屋に対するイメージは中学生で止まっているわけで、あまり参考にならないかもしれないけど……。

「それで？　あたしとお話ししたいって？」

と僕にジューズを手渡しながらブルマさん。

「はい。」

あの、ブルマさんはドラゴンボールって知ってますか？」

僕がそう聞いた瞬間、ブルマさんは身体を乗り出す。

「あなた、ドラゴンボールを知ってるの!？」

「は、はい」

「ちよつと待ってて」

いそいそと部屋の右半分側にある謎の機械の中から何かを取り出すブルマさん。

それは……うわぁ、きれい……。

「こないだウチの倉庫の整理をしてたら見つけたの、綺麗でしょ？」

「うん、本当、綺麗」

なんとも不思議な玉だった。火蛋白石たんぱくせきのようなオレンジ色の玉。中に星が浮かんで

いる。透明ではないのに、なぜか中の星だけがどの角度からもしっかりと見えていた。

ドラゴンボールである。

「それで文献を調べてみたのよ！」

「七つ集めると、何でも願いが叶う」

「うん。僕もびつくり」

ああ……嘘がすらすらと……。

「それで、どうするの？」

あなた、この辺の子じやないでしょ？ 服装が違いすぎるもの。もしかしたら、結構

遠くから来たんじゃない？」

「どうもしない。ドラゴンボールが見られたから、満足」

そう言つてジューズを飲む。

葡萄ジュースだった。

「そう？ あたしとしては連れてつてあげてもいいんだけど……あなた、まだ小さすぎるものね。割と過酷な道中も覚悟しなきゃいけないから、いくらなんでも無理か……」

「うん」

ついでには行かない。

悟空の人脈は殆ど全てこの旅で築いたものだ。そのどれか一つがズレても本来の未来より悪くなる可能性がある。そんな危険は冒したくない。

僕の意思表示を聞いて、ブルマさんはドラゴンボールを差し出す。

「もつと見てもいいわよ。せつかく来たんだし」

「ありがとう」

素直にそう言ってドラゴンボールを受け取る。

手の中でぐるぐる回しながら眺める。本当に不思議な玉だ。

「なんなら今夜うちに泊まってく？　うち部屋いっぱい余ってるし。」

さすがに一人……ってことはないわよね。親御さんも呼んで来ていいわよ」

「大丈夫。僕一人で来たから。」

ええつと……、お世話になります」

「本当に？」

すごいよね……最近の子供って……」

「明日からしばらく観光します。宿、まだ決めてないから助かりました」

後半部分は本当のことだ。荷物はまだクロークサービスに預けたままだが、昨日まで居たホテルは今朝引き払ってきた。元々今日決着をつけてここを出るつもりだったのだ。

しかし今は少し考える時間が欲しい。

前半部分の出任せ通り、もうしばらく観光していくのも悪くないかもしれない。

「なら滞在中はずつとうちに居てもいいわよ。母さんもあんたのこと気に入ってるみたいだし」

「はい。ぜひ。」

ありがとうございます」

こうして、しばらくここに泊まることになった。

~~~~~

夜。与えられた客室で僕は横になる。

部屋の掃除も僕のお世話も全てロボットがやっていた。確かにこれなら泊まってい  
けと軽く言えるかもしれない。全てが全自動化されているのだから。

ふう……。

これからどうしようか……？

とりあえず今年一杯は手が出せない。

ドラゴンボールは願いを叶えると一年間ただの石に戻ってしまう。なら小方シャオファンを治す  
のは再来年になるのか。青春真つ只中の二年は貴重なだけだな……。

あー時期が悪かった。

まさかのドンピシャだよ。

はあ……再来年まで何をしようか？ 帰ろっかな……。修行の続きもしたいし。

でも折角出てきたしな……。

「チャオズ様、夕食ニナリマス」

そうこう考えているうちにロボットが晩御飯をワゴンで運んできた。

早速ベッドを下りてテーブルにつく。

「ドウゾ」

食事の載った皿を一枚一枚テーブルに並べる。それが終わると、ロボットは壁の端によつてジツと立った。

僕は久々のナイフとフォークを両手に持ち、今夜のメインであるステーキを切り分ける。

うん、美味しい。

肉を齧りながらサラダ皿に入っているミニトマトをフォークで転がす。

ドラゴンボール、本物は綺麗だったな……。あれなら普通に宝石としても価値があるだろうね。まあ、そうでなきや色んな人に拾われたりしないか……。拾った人もまさかあれからシエンロンが出て来るとは夢にも思わないだろうな……。

……シエンロンか……。本物見てみたいな……。

そう言えばシエンロンが最初に出てくるのはどこでだっけ……？

フォークで転がしていたミニトマトを挿し、口へと運ぶ。

ん〜と？

そうだそうだ。たしかピラフ城だ。

噛み締める。美味しい。

酸味よりも甘みの方が強い。

そこでピラフ一味にドラゴンボールを奪われて、そしてシエンロンを呼び出されて

……。

……ん？

あれ？

これ、もしかしたら――

いけるじゃん。

おおー！ 全然いけるじゃん！

そうだよ。そうだったよ。

シエンロンだつてギヤルのパンティを出すくらいなら小方シャオフアンを治したいはずさ。

そうだった。原作においてはピラフの世界征服を阻止する為、ウーロンが横からギヤルのパンティを要求したんだ。酷いことするよね。やる気があるんだからやらせとけばいいのに。世界なんて誰が上に立つてようとそうそう変わらないんだからさ。

よしっ！

作戦は決まった。



何だかんだで西の都の名所観光も粗方し尽くした。もうここに残ってやることはない。さ。て。

この三日間に思いついたもう一つの作戦を実行に移す為、僕は携帯電話を取り出す。忘れてはならない、この地球はこれから様々な強敵に出会うのだ。

そのための備えを今のうちに、出来るだけしておくべきである。

人事を尽くして天命を待つというやつだ。僕に今出来るだけの人事を尽くそうと思う。

耳無しの番号を選択して通話ボタンをブツシュ。

コール音に耳を傾ける。

『はい、耳無しでございます』

「耳無し？ 僕、チャオズ」

『これはこれはチャオズ様。お久しゆうございます。』

本日はいかがなさいましたか？』

「調べて欲しいことがある。大丈夫？」

『はい、大丈夫でございますよ。どうぞ仰つてください』

「うん。まず、パオズ山の周辺にいる兔すしものの筋者の所在情報が欲しい」

『かしこまりました。パオズ山の近くで、兔の極道の所在情報、でございますね。』

それなりの数になるかと思いますが、よろしいでしょうか?』

「うん。データで送って。それと極道じゃなくても、似たようなことをしてる人でもい

い」

『はい、かしこまりました。では後程データをお送りいたします』

「もう一つ。」

占いオババって呼ばれる凄腕の占い師の居所が知りたい」

『はい。占いオババと……。こちらの方は何が特徴はお有りでしょうか?』

「えっと……。ものすごく占いがあたって、ものすごいお金を取る。」

でもオババの用意した武術家と戦って勝てば、お金が必要なくなる。結構有名らし

い」

『なるほど。では、こちらも調べて参ります』

「お願い。頼んだ」

『いえいえ、存分に頼ってください。チャオズ様。』

他にも何かございますか?』

「今の所ない。」

ありがとう。必要になったらまた電話する」

『はい。そう言えばチャオズ様の近況はどのようなものでしょうか？ 天津飯様が気にされておいででしたよ。』

鶴仙様も口にごそお出しになりませんが、たまに遠い目をする時がございます」  
「うん、えつとね——」

その後、二十分程お互いに近況報告をしてから電話を切った。

うんうん、頼れる人脈があるっていいね！ これで情報が来るのを待てばいいよし。

ここから僕の計画が始まる。

ふっふっふ……。

サイヤ人だか宇宙の帝王だか知らないけど、地球人の恐ろしさを見せ付けてやる。

## 第七話 極悪非道、白の鬼

黒色★収入日より

十八号

盗賊同志会報 第二百

▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲▼  
夏の暑さもすっかり和らぎ、過ごしやすい秋の季節となりました。

読書の秋、食欲の秋、スポーツの秋……と沢山の秋があります。しかし、私達にとつては何と言つても旅行の秋ではないでしょうか。この季節、夫婦親子連れの力モがそれこそ鴨のように数多く街道をやつて参ります。皆様におかれましても気持ちの良い紅葉が舞い散る最中、<sup>さなか</sup>鋭意的に鴨狩りを楽しんではいかがでしょう。いつもと違う気分が味わえるかもしれません。

さて、お仕事に邁進するのも良いのですが、季節の変わり目は体調を崩しやすくもあります。やつと涼しくなったと油断してはいけません。特に今年は新型ウイルスが猛威を振るつています。くれぐれも衛生管理にご注意いただき、絶好の略奪日和をご満喫ください。





編「それでは早速、当日の様子をお教え下さいますか？」

留「……………」

……あの日、おれらの半数くらいが酔っ払ってました。いえ、酔っ払ってるのはいつものことなんです、あの日の前日は運よく商隊が通って、それを囲んで皆殺しにして、分け前も一杯みんなに行き渡って……。それで前の晩、みんないつもより多く飲んでたんです」

編「なるほど。皆さん、いつもよりも弱っていた状態だったんですね」

留「いえ！ そんなことありません！

ほんと、うち等は酔っ払っているのがいつものことなんです。むしろ酔ってた方が理性とかタカとかがもろもろ外れて、素面より強いくらいなんです」

編「つまり、戦闘力的には変わらなかつた」と

留「ええ。」

……最初に誰が言ったか、酔い覚ましにみんなで川で泳ごうって話になりました。それで大所帯でぞろぞろと川に向かってつたんです。

それで……それで……丁度街道を横切ろうって時、あ、あいつ、がつ、け、来たんです」

留<sup>リユウ</sup>さんは震える手で湯飲みを持ち上げ、お茶を口に含んだ。

どうやら当時の恐怖を思い出して、混乱しているようである。

私は彼が落ち着くの見計らい、話の続きを促した。

編「どんな様子でしたか？」

留「……餓鬼が、背中に大きな背リュック包を背負っていました。まずはそれが最初に目を引いて……。それでみんなついだし、軽くぶつ殺して背リュック包持つてくかつてなりまして……」

編「なるほど。まあ当然ですね」

留「みんなあのかい背リュック包を誰が持つたかでじゃれ合いみたいな軽い口喧嘩してたんですけど、その時おれ、ちよつとやばいかもって思ってたんです。

おれ、黒収だよりを毎週欠かさず読んでて、どうもあの餓鬼の特徴が黒収だよりの速報に載ってる小白鬼シヨウバイグイと似てる気がして……」

編「ご愛読ありがとうございます。」

その似てたとは、具体的にどんな風には？」

留「……真つ白な顔して、八歳くらいの餓鬼で、服にでかかど“鶴”の文字がありました」

編「我々がリサーチした通りですね」

留「ええ、速報に書いてあった通りで……。あ、あの時、おれがもつと強く言つてれ

ば……。

でも、誰だつて思わないじゃないですか、自分がそういう災害に行き当たるなんて」  
編「はい。得てしてそう言うものなんです。『まさか自分が』、と考えてしまいますから……。

思い出すのはお辛いでしようが、それからどうなりましたか？」

留「まずはお頭が脅しを入れました。どうせ最後には殺すんですけど、みんな人間の怯える表情とか大好きで、基本脅しから入るんです」

編「なるほど、古くからある良き手法ですね」

留「そうしたらいきなり、お、お頭の、く、く、首が、ぐるぐるって、ぐるぐるって回って、と、飛んでつたんです」

留さんはここで一旦話を切り、湯飲みの中のお茶を飲み干した。

そうして気持ちを落ち着かせるように一息つくつと、視線を再び私の方に向け、続きを話し始める。

留「……おれらみんな訳が分からなくて。だつて、首が独りでにぐるぐる回って飛んでつたんですよ？ おれ含めてみんなポカーンとしてました。あの餓鬼だつて少しも動いてませんでしたし、関連付けて考えられるわけじゃないじゃないですか」

編「ふむふむ。それは小白鬼シヨウバイグワイの超能力ですね。こちらでもその情報は報告されていま

す。正直眉唾物でしたが……どうやら本当のようでしたね。あ、続きをどうぞ」

留「そ、それで、あの餓鬼、にやりって、わ、笑ったんです。

おれはもう真冬にストーブでぬくつてるところを、背中から氷柱突つららつ込まれたような気分になりました。金玉縮み上がつちまつて、全身鳥肌が立って……。

あいつ、笑った顔がまるで悪魔みたいで……。今でも、ゆ、夢に」

編「“白鬼笑”ですね。噂になっていきます。

なんでもアレに出会って生き残った人は、皆それを思い出しては震えるそうで」

留「おれ、逃げなきやばいって、みんなにアレのこと知らせなきやって、そう思つて……。

でも、おれ、アレに注目されたくなくて、だから小声で言つたんです。でもみんな聴こえてないみたいで、とりあえずよく分からないから得物持つて突つ込んでいって……。

……最初に死んだのは波西フのオンシーでした。アレの指が光つたかと思つたら、はっ、破裂したんです。

……気の良い奴でした……。よくおれと一緒に女攫つて犯したり、逃げる餓鬼追つかけて殺して遊んだり……」

編「親友だったんですね……」

留「それで前日の夜に、里のお気に入りの娼婦に自分のガキが出来たって、それで次のでかい略奪が終わったら足を洗いたいって、酒を飲みながら言ってたんです。

……畜生、何であいつが死ななきやならなかつたんだよ！」

編「それは死亡フラ……いえ、ご愁傷様です」

留「よく分かんないうちに波西ブッシュが破裂して、でもそれだけで終わらなかつたんです。あいつ、丁度おれらの真ん中辺りに居て、それが破裂したもんだから体の破片が周りの奴らに突き刺さつたんです。

……もう、阿鼻叫喚でしたよ……」

留リュウさん当時の様子を思い出したのか、悲痛な顔をした。

留「やつとみんなやばいって気づいて、半数くらいが逃げ出したんです。もう半数は向かつて行きましたけど……」。

おれは真つ先に泣いて謝りながら逃げましたよ。へ、へへ……もしかしたら、俺が生きているのって、そのおかげかもしれないね……」。

……おれのこと、臆病者だって笑いますか？」

編「いえ、状況が状況ですし、仕方のなかつたことでしょう。」

実際留リュウさんの行動は正解でしたよ。様々な生き残つた遭遇者からの証言の統計によりますと、どうも泣いて謝るのが一番生存確率が高いようですから。

それでは、留<sup>リュウ</sup>さんはもうその先を見てないんですか？」

留「確かに全部は見てませんけど、何が起つてるのかはなんとなく……。超能力だと思いますが、アレが空に浮かび上がりましたから……。」

それでした。ピカッ。つて、指先が光るんです。

光るたんびに誰かの悲鳴が響いてました。波西<sup>フクオシ</sup>のようになつたんでしようね……。

おれはもう、いつ自分の番が来るか気が気じやなくて……。その時は生きることだけ考えて走りました。ごめんなさいごめんなさい言いながら出来るだけ誰も来ない方に逃げましたよ。巻き込まれるのは御免なんで……。」

編「そして見事逃げ<sup>おわ</sup>逃げたわけですね」

留「逃げ……。遂せれたんですかねえ……。」

あの後森の中で九時間くらい土下座してました。いつ見つけられてもいいように……。」

おれ……。本当に逃げ<sup>おわ</sup>逃げられたんですかねえ？ 今でもアレが追っかけて来てる気がして……。」

……。う、うううう……。」

ここで留<sup>リュウリン</sup>林様が嗚咽を漏らして泣き始めたので、取材はここまでとなります。



今までの報告からまとめた小白鬼ショウバイグイの情報をここに公開する。皆様自身の安全の為に、是非参考にして頂きたい。

小白鬼ショウバイグイは八歳前後の子供で、真つ白な顔をしている。大きな背リュック包を背負っているとの報告も多数上がっている為、これも事実だろう。

そして“鶴”の紋章が入った服を身に着けていることが多い。

運悪く出会ってしまつた場合、八割五分死ぬとの統計結果が出ている。生存率は限りなく低いと言わざるを得ない。

しかしそこで諦めてはいけない。そんな時の為の、生存率を上げる三カ条をここに記そう。

第一条、いきなり襲い掛からない。

子供が大きな背リュック包を背負つて一人で道を歩くと言うのは、一見かなり好条件な物件に思える。しかしそこでちよつと待とう。ひよつとしたらそれはフェイクかもしれない。

襲い掛かる前に必ず獲物が上記の特徴に当て嵌まるか確認するよう習慣付けることをお勧めする。

小白鬼ショウバイグイに襲い掛かり、尚且つ生還した例は、今のところ僅か一件しか確認されていない。殆どの場合、襲い掛かつた瞬間に殺害されてしまう。獲物の事前検証を怠ることは



死に直結することもあるのだ。

第二条、命乞いをする。

第一条に従い行動したが、しかしすでにショウバイグイ小白鬼の前に出してしまった、または見つかってしまった場合、この第二条が有効である。

なんと今現在、ショウバイグイ小白鬼との遭遇から奇跡的に生還した人の全てが命乞いをしたと記録にある。

皆様には長年盗賊をされて来た誇りがあるだろう。そして部下の手前、そんな無様な真似など……！　なんてこともあるかもしれない。

しかしそれら全てをかなぐり捨てても、この項目を実行に移す価値はあるのだ。

人の命は一つしかない。例え培ってきた誇りを失ったとしても、親愛なる部下からの信用が失墜したとしても、生きている限り、やり直しが利く。だが、死んだら全て終わりである。

是非ご自身の生命を大切にしていきたい。

第三条、財宝を差し出す。

さあ、ここまでくれば生還までもう一息。

命乞いをした者に対し、小白鬼シヨウバイグイは高確率で全財産の献上を要求する。

これを拒否したことにより殺害された例も数件確認されている為、無策で断わらない方が身の為である。惜しい気持ちは分かるが、ここは断腸の思いでお宝を全て差し出すことが最も安全だろう。

また献上金が少ないことにより不興を買い、四肢を切断されると言う事例も数件確認されている。少ないなどと文句を言われぬ為にも、ある程度の財宝を貯蓄することをお勧めする。

未確認の情報ではあるが、小白鬼シヨウバイグイはホイポイカプセルに価値を見出さないと報告もされている。ひよつとしたら、余剰財産をホイポイカプセルに替えておくことで損失を減少させることが出来るかもしれない。

以上の三カ条を遵守することで、飛躍的に生存率を上げることが出来ると当編集部は推測する。

後日再来の可能性に備えて、本拠地を別の場所に移すこともやっておきたい。

それでは、最後に運悪く災害に出会ってしまった皆様に助言を一つ。

「蟻がロードローラに突っ込むのは勇氣ではない。只の自殺である」

また次回の白鬼速報でお会いしましょう。

※当編集部では小白鬼シヨウバイクイの情報を広く募集しています。

有益な情報提供者には金一封を差し上げます。どしどしご応募ください。

▼今週のトピックです

今年で四才になるサーベルタイガーの小梅ちゃん。激汗団ジイハントアンの熱い漢達おとこに囲まれ、今日もマスコットとして大活躍です。

そんな小梅ちゃんの嬉しいニュースです。

先週火曜日、小梅ちゃんからめでたく元気な四つ子の赤ちゃんが産まれました。

小さく、ふわふわな赤ちゃんに団員一党はメロメロ——

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

「どうも、すみませんでした！」

「すみませんでした！」

何だろ、この状況……。

ここはパオズ山から約600km離れた場所。

辺りに植物を見かけなくなり、岩ばかりが立ち並んでいる。

一面黄土色の砂漠一步手前な景色は、まさしく荒野と呼ばれるものである。

そこに“荷物置いてけ”と脅しをかけて来た追い剥ぎさん。

「さつき脅しをかけられたような……」

彼らは僕が何かする前に突然目を皿のように見開いて驚き、そして揉み手をしながら謝罪してきたのだ。

「やだなあく、坊ちゃんつたら〜。あれはジョークですよ、ジョーク」

「そ、そうですよ！ もう、ヤムチャ様つたら〜」

脅したことを謝罪したばかりなのにそれをジョークと言う。僕の予想以上に彼らもテンパっているのかもしれない。

『ま、まさかさつきの今で遭遇するとは……』

『ここは平身低頭の一択ですよ、ヤムチャ様』

なんかこそそ喋っているが、全部聴こえている。

天さん程じゃないにしても、僕の五感も一般人より遥かに上なのだ。

とは言え、意味が分からない。さっきの今とはどう言うことなのだろう？

僕は以前こいつらと会った記憶はない。例え彼らが僕の良く知る人物だったとしても——。

しかしこの流れは歓迎すべきである。ここで彼らへの過剰な干渉は避けるべきだ。

ここまでできて未来が変わってしまったなんてことになったら、僕がドラゴンボール探しを自粛したのが馬鹿みたいである。ここで立ち去れば影響はほぼないだろう。

もちろんバタフライエフェクトが起こる可能性は完全に否定できないが……こうなってしまった以上、そこはもう諦めるしかない。

『なあ、プーアル。本当にこいつがあの小白鬼シヨウバイクイなのか？ 只の餓鬼じゃないか。

と言うか、例え本物でもオレなら勝てそうな気がするのだが』

『ダメですよヤムチャ様。今までそう言って何人も人が殺されて来たんですから』
変わらず小声でこそそそと喋っている二人。

とうやら、僕に襲い掛かるべきかの相談のようだ。

『いや、見ろよ、あの油断しきった姿。今なら確実に殺れる——』

『ヤ、ヤムチャ様っ』

そろりそろりと腰にある曲刀に手を伸ばすヤムチャさん。

僕には油断した覚えが欠片もないのだが、一体どこを見てそう判断したのだろうか？
ヤムチャするなあ……ヤムチャさん……。

「あ、あれ？」

「ヤムチャ様！ 身体が動きません！」

『超能力、念動固定』

対象はヤムチャとプーアルの全身。

「こ、これが小白鬼シヨウバイグイの超能力。クツ！」

僕の念動固定に抗おうとするヤムチャ。

この頃の彼は感覚で気を使っているから、僕の超能力を解除するのは難しいだろう。
しかしこうして超能力で固めたのはいいが、このまま放置したら、効果が切れた頃に
また追いかけてきそうだ。

仕方ない。少し脅しておこう。

無造作に右手人差し指を差し出す。

「どどん波」

——バコツ、バコツ、バコツ、バコツ、ちゅどーん！

強めに撃ったどどん波はヤムチャの頬を掠かすり、彼の後方へと飛んで行く。

そのまま荒野に立ち並ぶ石柱を四つ打ち壊し、約400m先の地面に当たって爆発。空に小さなきのこ雲を作り上げた。

空から砂と小石がパラパラ降り注ぐ中、ここで念動固定を首だけ解除。

曲刀に手を伸ばそうとしたポーズのまま、首を後ろに向けてきのこ雲を見上げるヤムチャとプーアルの二人。

プーアルは無意識になのか、“あわわわわ……”と呟き、ヤムチャは目を丸くして鼻水が飛び出た表情で固まっている。いや、固めたのは僕だが。

そして僕の方を向いて“ニコッ”と笑うヤムチャさん。

「あの……坊ちゃん。実は僕、坊ちゃんに全財産をプレゼントしたいな〜と」

「はい！ 金貨・宝石、何でもありますよ！」

念動固定を解除。

「いらない。帰れ」

「はいっ！ 失礼しました〜」

ヤムチャとプーアルは同時に跳躍し、プーアルはヤムチャの肩に飛び乗り、ヤムチャはバイクに飛び乗った。うん、お見事！ いい連携だ。

二人の乗ったバイクは“ブルルン！”と音を立て、土煙を上げながら走り去っていく。

そして舞空術を使い続けたおかげか、僕の気の総量が順調に増加している。

これは嬉しい誤算の一つと言えよう。

さて、まず僕はパオズ山に向かい、そこを旅の始点とした。

原作において僕が覚えている地名がパオズ山しかなかったからである。

とは言え、これからの方角に進むべきかとパオズ山麓ふもとの山賊団アジトで悩んでいた

ら、以前耳無しに頼んでおいた情報が携帯に届いた。

パオズ山周辺で極道的なことをやっているうさぎの情報である。

どうも耳無しは「パオズ山周辺」と言う曖昧な指示に対し、かなり広い範囲の解釈で

調べてくれたみたいだ。パオズ山を中心に半径3000km程の情報が僕の手元に届

いている。

しかしやはり「うさぎ」のカテゴリーに属する獣人やくぎは少ないのか、名簿にある

名は全部合わせても二十三人しかない。

そして、その中に覚えのある名を見つける。

兎人とにんじんか参化。

そう言えばこんな変てこな名前だったな〜と、ついでに前世も思い出して、少しノス

タルジツクな気分になる。

ブルマさんが旅に出る九月まで残り十一日。

長期休暇が十月に終了すると言っていたので、そこから逆算して考えると、彼女が孫悟空と出会い、物語が始まるまでもうあまり時間の猶予はない。

その前に兎人とじんじんか参化を配下にし、ピラフ城を見つける。

これが僕のとりあえずの目標である。

パオズ山を出発し、ヤムチャとエンカウトしたのは二日前。そしてつい先日、フライパン山を上空から見学した。

燃え盛る火炎山を見て、感動がじわじわと僕の内側から溢れ出す。

今僕はまさに、ドラゴンボールにおける初期の舞台の真っ只中にいるのだ。

ぼーと飛んでいたら、いつの間にか荒野を抜けていた。

辺りには背丈1m〜10m程の巨大きのが樹木のようにあちこちから伸びている。

地面の土は未だに水分の少ない乾いたもので、巨大きのが以外の植物は見当たらない。

そして進むごとに、巨大きのがこの数はどんどん増えていった。

僕は巨大きのを避けながらの飛行を続けていた。

この何だかファンシーな光景を楽しむ為に、地表すれすれでの超低空飛行を行っているのだ。

そして、このきのこの回廊を飛び続けて、二時間が経過した。

「えい」

すれ違い様に巨大きのこのパンチ。

ボコツと抉れるきのこの幹。

結構硬い。通常の樹木とほぼ同じくらいだ。

面白い。本当にこの世界は不思議で一杯である。

「あ」

顔を前に向けると、視界が一気に広がった。

巨大きのこの森を抜け、砂色の町が見えてきたのだ。

突き出た丸い屋根や三角錐の屋根。石造りの家が数多く立ち並ぶ町並み。

中々に広そうである。これだけの面積があれば、都市と呼んでも差し支えはないだろう。

よし。

飛行スピードを上げて町の中へ。

「わわ?!」

「な、なんだ?!」

シユタツと着地する僕に驚く周りの通行人。

気にせずに通りを進む。驚愕した人々も特に大騒ぎすることなく、いつもの生活に戻っていった。

そもそもこの世界では、人間が空から降りてくるのはまあ、珍しいだろうが有り得ないことではないのだ。伊達に種族が多いわけじゃない。少々の非常識は皆、”あら、びつくり”程度で終わらせてしまう。

キヨロキヨロと辺りに目を向けながら大通りを歩く。

町全体がオリエンタルチックな砂色である。街路樹のように巨大のこが道の両脇に並んでいて、先へと続いていた。

所々椰子の木が首をもたげているのを見て、”久しぶりにきのこ以外の植物を見たな”などともうでも良い事を思う。

道には駱駝らくだを引くターバンの男性、巨大のこの下では井戸端会議をしているヒジャブやニカーブの女性。まさにアラビア〜ンでイスラムく光景である。

僕はそんな異国情緒溢れる景色の中を歩いていった。

そのまま通りを進んでいると、辺りは徐々に活気のある空気包まれていった。喧騒が耳に届いたのだ。

一歩進むごとに、それらは段々と無視できないポリウムへと変わっていく。

「らっしやいつらっしやいつ！」

「ナツメヤシ〜！ 甘い甘いナツメヤシ！ 1kg たったの百三十ゼニー！」

「採れたてだよ〜！ 今朝採れたて〜！」

「舶来品！ 舶来品！ 舶来品の壺はいかが〜！」

うん、うるさい。

故郷の蚤の市を思い起こさせる。どうやらここは市場らしい。

「ほい、坊主坊主。ちよつとこつち来て見」

露店の中から、フェズを頭に被った髭のおっちゃんが僕を手招きする。

なんだろ？

「坊主、観光だろ。」

おっちゃんマームール売ってんだ。甘くて美味しい老若男女誰もが気に入る」

なんだ。呼び込みか。

「おやつにしてよし、お土産にしてもよし。」

おすすめだよ。今なら特別に安くするぞ。どうよ？」

んつと……。

うん。買ってこよう。丁度小腹も減ったしね。

「いくら？」

「なんと一袋たったの六百ゼニー！ さーどれにする？

こっちはナツメヤシが入ってて、こっちは胡桃くるみだ」

「何枚入ってる？」

「うゝん。十二、三枚くらいかな？」

「うん。買う」

「毎度ありゝ」

「五十ゼニーで」

「……………え？」

「お腹減ったー。はやくー」

「いや、坊主。五十じゃなくて六百…………」

「はい、五十ゼニー」

流れる動きで五十ゼニーを手渡す。反射的に受け取るおっちゃん。

「う、うん。いや、じゃなくてね」

「ナツメヤシの方で」

「は、はいつてそうじゃなくてね」

またしても反射的に僕にマームールが入った袋を手渡すおっちゃん。

「適正価格」

袋を持ちながら僕はにこにこして言う。

さつき、原材料のナツメヤシが1kg百三十ゼニーで売られていた。これくらいのサイズの袋に入ったマームールならこんなもんだろ。

それに、僕が五十ゼニーを渡したらおっちゃんは反射的にそれを受け取ったのだ。きつとそれだけ常日頃から、この程度の小銭を受け取ってきたのだろう。

僕の商品要求に対し、これまた反射的にマームールの袋を渡したのも、心の中でおっちゃんがこの五十ゼニーという値段に納得しているからに他ならない。

「いや、まいったね。」

でもこれだけの量があれば、適正価格は百ゼニーくらいだよ。

さすがに五十ゼニーと言うのはねえ……」

苦笑いするおっちゃん。

僕は受け取った袋を開けてみる。

「かなり碎けてる。不良品だから五十ゼニー」

「いやいや、そんな、碎けてないマームールなんて大きい百貨店にしか売ってないよ」

うん、そうかもしれない。

僕のこれはただのいちやもんだ。

しかし、すでに商品を僕に渡した時点でアドバンテージはこちらにある。

ここで僕が何も言わずに立ち去れば、それで交渉の余地なくこの件は終わりだ。

「道教えて。ポーナスあげる」

「道？ 坊主、迷子だったのかい」

「うん、そんなもの。」

うさぎ団の本拠地が知りたい。どこか分かる？」

「う、うさぎ団って……、あんな物騒なところに何しに行くつもりだい、坊主」

さすがに驚いた顔をする。

「大丈夫。待ち合わせ」

「待ち合わせって……あんなところで……？」

「知ってる？」

「あ、ああ……」

「この道を通つ直ぐ行つて市場を抜けて、最初の大きな交差点を右に曲がる。そつから延々と歩いて二十分くらいだな。そしたらでっかい人参にんじんの建物があるから……まあ、見りや分かる」

「ありがとう」

「いいか坊主、あそこに近づくんだったら本当に気をつけるよ。」

「待ち合わせしてる奴に会ったらずぐ離れるんだ」

「うん。分かった」

ポケットから三千ゼニーを取り出し、露天のカウンターに置く。

「はい。ポーナス」

「お、おー!?!」

そのまま踵を返し、立ち去る。

どうせはした金だ。今の僕は割りとお金持ちなのである。

ふふんつと、ちよつといい気分になって市場を歩く。

辺りは変わらず売り子の呼び込みの声に満ちていた。

「赤い、赤いりんご〜! 甘い、赤いりんご〜!」

「ねえちゃん、無花果いちじくなんてどうだい。いや保障するから、ウチのは絶対に酸っぱくねえって」

「マームール! さくさくマームール! 三十個入りで三十ゼニー!」

「はい、安いよ安いよ〜! マームール、三十個入りで三十ゼニー!」

……。

……。

……。

……ボーナス、上げなくてもよかったかも。

~~~~~

「……」

目の前に大きなオレンジ色の人参にんじんがある。

もちろん本物ではなく、人参の形をした三階建ての建築物だ。

「……………」

僕の頬に一筋の汗が流れる。

すごいセンスである。

ヴィオラートに通じるものを感じる……。

前にも述べたことがあるが、僕がここに来た目的は鬼の獣人、とにんじんか 兎人参化を配下に引き

入れることである。

僕は考えた。

地球人の身体能力ではどう逆立ちしても強力な異星人には勝てない。

基礎能力がまるで違うのだ。

ならどうするのか。

負けることが地球人類の存亡に関わる為、簡単に諦めることは出来ない。

そしてここを現実として生きていく以上、全てを完全に主人公に放り投げるのもなんだか不安である。

僕は再び考え込んだ。

そもそも、単純な身体能力だけのガチンコ対決で強力な異星人に勝とうとすること自体間違いなのだ。

素手で老虎ろうこに挑む人はいるのか？

いる訳がない。

もしいたとすれば、それ阿呆あほうか独歩さんである。

まともに戦って勝てない相手は、それ以外の方法で無力化しなければならぬ。

つまり僕ら地球人に必要なのは、虎に対する猟銃のような、そんな切り札だ。

とは言え、地球の科学技術で作り出せる兵器が奴らに通じるとは思えない。

戦車は怪獣に踏む潰されるのがお約束なのである。

さて。

この地球上には摩訶不思議な生命体、通称人間が数多く存在する。

その中には反則的な一芸に秀でたものが、少数ながらもいるのだ。

ならばそれを利用して行こうと言うのが、今回の僕の行動理由である。

「おい、糞餓鬼！ てめえ、さつきからウチの前を何ウロチョロしてんだよ」

「ははは」

人參の中から兔耳軍服のおつちちゃんが二人出てきた。

頭をすっぽり覆うパイロット用の軍用帽子とゴーグル足す兔な耳。

……一体誰得なのだろうか……？ と言うか、暑くないのだろうか？

そして可笑しなことを言う。

僕は玄関の前にジーと立っていただけで、ウロチョロなどしていない。

「今俺ら丁度暇してんだよ。どうだ？ 暇潰しにお兄さん達が整形してやろうか？」

「おいおい、怯えてんじゃねえか、ギヤははははは」

片方のおつちちゃんがなんか自分のことを「お兄さん」とか図々しいことを言っている。そしてもう片方は笑い上戸のようだ。ついでに目も悪いらしい。

とりあえずこいつらには用がないので軽くばんち。

「うんぎやっ」

「うぷっ」

前にいる兔耳をブツ飛ばし、後ろにいる兔耳にぶつける。

「な、な、こいつ、やべーぞ」

「あ、あにきー、来てくれーあにきー！」  
軽すぎたか。

這つて人參の中に戻りながら、あにきなる人物を呼ぶ二人。  
「なんだ？ どうした、お前ら」

「まったく、人騒がせな」

呼ばれて出てきたのは髭の生えたデブと煙管キセルを啜えたノツポ。

同じく兎耳に軍服のファツションだ。

顔に付けたゴーグルが日の光を反射してピカツと光り、左胸のデフォルメされたうさちゃんマークが愛らしく微笑んでいる。

そして二人の左腕に“うさぎ団”の腕章。

「あ、あの餓鬼がー」

「助けてくれよーあにきいー」

「……マジで言つてんのか、てめえら？」

「こんな子供に……だからいつまでたつても仮団員のままだよ、お前らは！」  
縋りつく下っ端に蹴りをくれてやるノツポ。

「で、てめえはなんだ？ 糞餓鬼」

「二、三発で勘弁してやろう。そうしたら消えていいぞ。」

そら、じつとしてろ」

状況を把握しているのか把握していないのか、意味不明なことを言う二人。とりあえずこいつらには用がないので軽くばんち。

「うんぎやつ」

「うぷつ」

前にいるデブをブツ飛ばし、後ろにいるノツポにぶつける。

「な、な、こ、こいつ、やべーぞ」

「お、親分ー、来てくれー親分ー!」

這って人参の中に戻りながら、親分なる人物を呼ぶ二人。

……なんかデジャヴユ。

「どうしました、あなた達。人騒がせな……」

出てきたのはチャイナ服にサングラスのうさぎ。

間違いない。目当ての人物だ。

耳無しから送られた資料によると、名は兎人参化<sup>とにんじんか</sup>。

うさぎ団という少数精鋭の黒帮<sup>ヘイバン</sup>を率いている。

彼の能力はその名の通り、人参化。

触れた生物を人參にすることが出来るのだ。

原作漫画において、彼は敗北した孫悟空により強制的に月へと放逐される。

その後、天下一武道会で大猿と化した悟空を元に戻す為、亀仙人が月を破壊。月と共に木つ端微塵となった可哀相なうさぎさんである。

「で、でも、あの餓鬼がー」

「情けない声を出すんじゃないやありません。まったく、こんな子供相手に——」

うさぎさんが絶句し、立ち尽くした。

サングラスがズレ、口は半開き。目は大きく見開いている。

「あ、あなた達！」

喧嘩を売る時は相手を見て売りなさいとあれ程言ったでしょ！」

うさぎは引き攣った笑みを浮かべながら、揉み手で近づいてくる。

「すみません、坊ちゃん。

ウチの馬鹿共がご迷惑をお掛けしたみたいで……」

「お、おやぶん!?!」

「どうして!?!」

「黙りなさい！　そして良く見るのです。あの胸の“鶴”の一字を！」

僕の胸を指差すうさぎ。

「あ……あー!!」

「これは坊ちゃんが鶴仙人様縁ゆかりの者である何よりの証明!」

うわあ……。

鶴仙人様、こんなところにまで影響あるの?

「そして白いご尊顔ごそんがほに大きなお荷物。

この方あなたこそ今巷ちまたで有名な暴れる災害! 小白鬼様シヨウバイグイその人なのです!」

「え? ……ひつ、ひいいい!」

「こ、殺さないでくれ!」

え?

それ、どこの巷ちまた?

で、何? その変な二つ名みたいの。

「と云うわけですので、どうかお許ゆるしてください。

何でも致しますので、お命いのちだけは……」

深く頭を下げるうさぎ。

それにしても……いひひ。

何でもするとは、何と云う棚牡丹たなぼた。

「うん。」



ならお前、僕の子分になる」

「え？」

「選択権はない。拒否したら殺す」

「え!？」

「お前を鍛える。一緒に来い」

超能力でうさぎを持ち上げる。

何しろ触ったら人参になってしまうからね。

「うーわわわわわ」

「お、おやぶん」

「置いてかないで」

手を伸ばすデブとノツポ。

「ん。ならお前らも来る」

超能力でこの二人も持ち上げる。

「え？ い、いや、あの」

「ちよつと遠慮したいかなんて——」

僕も空に浮かび上がり、持ち上げたこいつらと共に飛行を開始。

「ひ、ひ——！」

「いやー！ー！」

「なんでおれまでー！」

さー、楽しい楽しい修行の時間だ。